カールゲル著ケート語初等読本
およびドンネル収録音声資料試論

下村　五三夫*　　矢萩　悦啓**　　伊藤　大介***

Essay on N. K. Karger's primer of the Ket language and K. Donner's phonogrammic sound recordings

Isao SHIMOMURA*, Etsuhiro YAHAGI** and Daisuke ITO***

Abstract

In this paper we reviewed the first Latin alphabet primer of the Ket language, written by N.K. Karger in 1934, and also looked into the phonogrammic sound recordings of the languages of the Siberian indigenous minorities, made by Kai Donner in 1912-1913 and 1914, from the viewpoints of cultural anthropology and phonetics and proposed a talker identification method.

Ket, genetically still unknown, is a minority language spoken by a population of approximately one thousand persons, who live in the areas along the Yenisey and its numerous tributaries. Before the Revolution Ket had no form of writing. In 1934 the first Latinized primer of Ket, which was replaced by a Cyrillic version in 1938, was published by the then Soviet authority and helped liquidate illiteracy among Ket people. The new writing system consisted of 28 Latin letters, a single Cyrillic one, and two kinds of diacritic symbols, each of which was designed to be easily learned by phonetically naïve Ket speakers. Most of the hand-drawn pictures and the texts portrayed their natural surroundings, costumes, tent-houses, boat-houses, routine work, people, and shamanism. In short, they produced something like a biography of the indigenous people.

In reviewing Ket, we encountered a question concerning how to interpret a glottal stop sound occurring as an allophone in this language. Our answer is that if the sound spectrographic pattern of energy seen in the interval between a glottal stop sound and its

*　北見工業大学教授　Professor, Kitami Institute of Technology

**　日本赤十字北海道看護大学助教授　Associate professor, the Japanese Red Cross Hokkaido College of Nursing

***　北海道大学大学院博士前期課程　Graduate student, Hokkaido University

following consonant is proven to be created by an excessive glottalization, this interval can be interpreted as a trace of the syllable that once might have existed there.

In looking into the phonogrammic sound recordings made by Kai Donner, we made a series of averaged spectral analysis on 28 speech samples from four linguistically different groups, i.e. Ket (Paleo-Yenissey), Samoyedic (Uralic), Kamassian (Uralic), Turkish (Altaic), Tataric (Altaic), and Russian (Indo-European). It was discovered that all of the 28 speech samples showed a very similar acoustic energy pattern in which energy was attenuated around the five frequencies values of 0.2kHz, 1kHz, 2.6 kHz, 3.6kHz, and 5.8kHz, irrespective of their different phonological environments.

The discovery prompted us to propose a method for a talker identification. The method focused on the local peaks in the frequency region between F0 and 0.2-1kHz for vowels. Spectral envelopes of the frequency region between 3.6kHz and 8kHz were used for consonants. If the slopes of the local peaks of vowels and consonants are overlapped at several points in these frequency regions, the talkers of the samples under comparison will be regarded as the same. Using this method, we drew a figure in which Samoyedic speech samples were assorted into four groups and Kanmassian ones made a single group.

はじめに

本論文は、ロシア連邦シベリアの少数民族の一つ、ケート族（英名Ket～Yenissei-Ostyak,露名 **кеты～остяки～енисейские　остяки～енисейцы**）のラテン文字表記ケート語初等読本[1]、および当時唯一の録音装置エヂソン蓄音機により所謂蝋管に録音された音声資料（phonogrammic recording）を、文化人類学と音声学の視点より考察したものである。読本は1934年ソヴィエト連邦で出版されたものであり、蝋管資料はそれより約二十年前の1912－1913年と1914年の二度にわたり、オビ河とエニセイ河流域およびその連水地帯、下ってサヤン山地のアバラコヴォ村で収録されたものである。読本を執筆したのはケート語学者カールゲル（**Н. К. Каргер**, N. L. Karger）、録音記録の方はサモエード語学者カイ・ドンネル（Kai Donner **Каи Доннер**）である。

主として、教科書に登場する挿絵に対する文化人類学的考察は下村と伊藤が行い、ラテン文字表記例文と音声資料の分析と考察は下村と矢萩が担当した。しかし、最終的責任は全て下村にある。

1　Karger N. K.　*Bukvar* UCPEDGIZ　Moskva-Leningrad 1934.
Каргер Н. К. **Букварь　УЧПЕДГИЗ　Москва　Ленинград** 1934.

第一章　ケート語初等読本の読解

１－１　ケート民族

ケート民族は西シベリアの大河エニセイ河の中下流域、そこのタイガ地帯とトゥンドラ地帯に住み漁労と狩猟を営む少数民族である。**кет** ket は‘人’を意味する自称であって、複数形はデング **денг** deng ‘人々’という。他にオストィク **остык** ostykとかユグィン **югын** jugynとも言った。今もってその言語系統が不明であり、シベリアの謎の民族とも言われている。この言語はその孤立性と文法構造の特殊性から、古来多くの言語学者の興味をひいていた。ケート語はシベリアの他の言語、例えばサモエード語やトゥングース語、とは著しい違いを見せ、言語学者により、漢・チベット語、北コーカサス語、バスク語（Basque)、日本語[2]、ビルマ語、果ては北米インディアン語とまで、その系統関係を比較された経緯をもつものであり、しかもその根拠のいくつは強力であった。

謎の民族とはいえ、シベリア民族学は彼らの成り立ちについて次の様な歴史を再構築している[3]：祖先は青銅器時代にオビ河とエニセイ河の南の連水地域で、南シベリアのユーロペイドと古代のモンゴロイドとの混血によって成立した。紀元千年紀にチュルク語諸族、サモエード語諸族、ウゴル語諸族と接触をもつようになった。数波の移住によりエニセイ河北方に定着した。ロシア人との出会いは17世紀の初めである。

この南方起源説の成り立つ経過を、民族学者ポポーフ（**А. А. Попов** A. A. Popov）とドルギフ（**Б. О. Долгих** B. O. Dolgikh）の考えをモデルに更に詳しく紹介しておこう[4]。

十七世紀（史料の教えるところ)、ケートと言語的に親縁関係にあったアリン(Arin)、ヤリン(Yarin)、コット(Kott)、およびバイコット(Baykot)は、馬を飼い牧畜を行っていたが、農業も行い、更にはまた鉄鉱石からの鉄の精錬も知っていた。今日のケートは、ガウンに似た開放的な服を着、ショール(Shor) 族の鍛冶技術に近いものをもっており、これらはいずれも南方に起源がある[5]。エニセイ河流域のタイガは農業、牧畜には不向きであり、南方にその適地がある。また鉄鉱石はアルタイ山地がその供給地であり、

2　ケート語の権威クレイノーヴィッチ（**Е. А. Крейнович**, E. A. Kreynovich）博士は日本語の /**χ**ito/ ‘人’と /ket/ ‘人’が音声的に類似しており、両者になんらかの関連があるかの印象をもっていたという（ロシア連邦科学アカデミー民族学研究所― 通称**МАЭ** ―上級研究員スペヴァコフスキー博士 **А. Б. Спеваковский**, A. B. Spevakovskiからのご教示)。筆者（下村）は、上代日本語で「ヒト」は両唇音で始まる /pito/ ～ /Φito/ であり、むしろ音声的距離は遠いと指摘させていただいた。

3　**Энциклопедия Народы России. С**.189.
Издательство «Большая российская энциклопедия» Москва 1994.

4　Popov A. A. and Dolgikh B. O. The Kets. *The Peoples of Siberia*, edited by M. G. Levin and L. P. Potapov. The University of Chicago Press. Chicago and London 1965.

5　同論文、頁 608。

ここには鍛冶に優れたチュルク語系民族が居住している。これが彼らの故郷が南であるとする根拠である。

民族誌も南方を示唆する。その伝承は、「突破することが困難なほど高い山を越え、自分たちは南方からシベリアへやって来た」、と語る。東方にあるウラル山地は千メートル程であり、植生も地勢も踏破には容易であり、伝承の語る山とは考えられない。またケートの人々は決まって、「南に居た頃はトィシタッド Tys'tads '山の石人'から攻撃をうけ、北へ移住したのはそのせいだ」、という話をしている。次に、（エニセイ上流へやって来た）ケートは強いキリキ(Kiliki)の攻撃に遭い、河を更に下らなければならなかった。この伝承の内容は、（ケートの居住しない）エニセイ河上流のある支流につけられた名称の意味がケート語を基にして解釈可能である事実に暗合する[6]。よって歴史資料も民族誌も、彼らが南からエニセイ河上流に入り、その後中流域に下ったことを推測させるのである。

今日のケートの人口は凡そ千人を超えるほどであり、このうち母国語話者は半分以下である。第二次世界大戦では成人男性人口の半数が召集され、狙撃兵として対独戦線に投入され多くは戦死した。これにより戦後は数百人にまで人口が減少したという[7]。現在ほぼ全てのケート人はロシア語との二重言語話者であり、連邦公用語としてのロシア語と母語として各民族語の両方を初等教育の段階で習得させるという、法による言語政策が比較的効率良く行われた民族と言われている。古くは同語と系統を同じくする言語として、アリン語（the Arin）、アサン語（the Assan～Asan）、コット語（the Kott）があったが、周囲の民族との同化が進んだ結果消滅した。

１－２　ラテン文字表記初等読本

初等読本はロシア語で **букварь** ブクワーリ、英語で primer プリマーと呼ばれるが、ケート民族のための最初のものは、当時の欧州の殆どの国々で採用されていたラテンアルファベットによって書かれていた。それは *Bukvar* の書名で1934年UCPEDGIZ（学校教育出版）から出版されている。著者は前述のケート語学者カールゲルであり、同年モスクワとレニングラードで計1200部出版された。この部数は当時のケート民族の人口がこれほどの数しかなかったことを物語る。

この初等読本は、その後北方諸民族の初等読本がキリル文字 Cyrillic scripts（所謂ロシア文字のこと）を使ったものに取って代わられる1938年までの短期間、実際に教育現場で使用されたものである。言うまでもなく、スラヴ民族の使用する文字には、ギリシア文字に基づくキリル系とローマアルファベットに基づくラテン系との二種類

6　同論文、同頁。
7　同じく **А. Б. Спеваковский** 氏からの教示。

がある。前者はロシア語、白ロシア語、ウクライナ語、およびブルガリア語とセルビア語に於いて使われ、後者はポーランド語、チェク語、スロヴァキア語、スロヴェニア語、クロアチア語、マケドニア語で使用されている。この使い分けは東方正教（ギリシア正教）とローマカトリックの祈祷書―祈祷書もまた英語で primer である―の印刷文字の伝統に従ったものだ。

「十月革命」（旧露暦では十月だが、新暦により十一月に祝われる）ロシア帝政を打倒したレーニンは当初より、ツァーリ体制の抑圧的な社会法制度と被抑圧階級にはびこる文盲の象徴的原因とも見えたこのロシア文字を廃止し、英独仏という欧州列強と彼らに親近な文化をもつ西スラヴ民族が使用する文字である、ローマアルファベットを革命後のロシア民族の文字として導入しようと考えていた。彼はまたロシア帝国内の非ロシア系民族がその独自の文化を保存し発展させるためには、教育水準の急速な向上が必須であると考え、彼ら独自の文字をもつことが肝要であるとも確信していた。

新国字としてラテン文字を採用するというアイデアは、スターリンを除く当時のロシア共産党幹部の多くが欧州列強国での生活経験をもち、英独仏語を解するインテリゲンツィア出身であったことによっても受け入れ可能なものであった。また当時のロシア人大衆の間での識字率の極端な低さも、逆に、ラテン文字採用がむしろ容易であるとの考えを彼らに抱かしめる原因の一つであった。ソヴィエト連邦のその後の教育制度を確立した、人民教育委員ルナチャルスキー（**А. В. Луначарский**, A. V. Lunacharski 1875 - 1933）も、レーニンのこの考えを推進しようという考えであったが、彼自身も英独仏の外国語に堪能であり、更には人工国際語エスペラントの唱道者であった。

このようなラテン文字導入に肯定的な雰囲気のもと、1933年頃までに言語学者たちは北方諸民族の言語記述のための文字体系を完成させていた。本論文が扱うケート語初等読本もまた、初期ソヴィエト連邦が公認し、立法化までして推進した文字変換政策の下に出版されたものである[8]。しかし、この文字改革運動は数年で挫折する。1938～1940年スターリンはスラヴ民族に対しては勿論のこと、国内非スラヴ語系民族全てに対し、キリル文字に復帰することを命じたからである。

1938年という年は象徴的である。「右翼ブロック・トロッキスト陰謀団事件」の首謀者ということで、政敵ブハーリンが処刑され、あらゆる面での欧州風を嫌悪唾棄し、極端な排外主義を標榜するヨシフ・スターリンの独裁体制が完成した時代であった。彼が嘗ての革命運動同志であった友人たちのみならず、政治に無縁な学者までをも、

8　ソヴィエト連邦に於けるラテン文字初等読本編纂の歴史的背景は、金子　亨「ラテン式書記法始末記」（千葉大学ユーラシア言語文化論講座刊『ユーラシア言語文化論集』第３号、2000年3月30日）に鮮やかに描きだされている。

右翼トロッキスト、ドイツ、ポーランド、および日本帝国主義のスパイ等々の様々な罪名のもとに、次々と粛清処刑していた恐怖の時代であった。カールゲルが著したこの初等読本が刊行された1934年も、ラテン文字表記を採用した教科書編纂者や、それを提唱した言語学者に、自らの行方について何かしら恐ろしい結末を既に予感させる時代であった。

では、スターリンは何故ラテン文字をロシア文字に復帰させたのか。グルジア人であるスターリンは歴史的に敵対関係にあったトルコ系民族を嫌悪していた。連邦内でトルコ系民族がその連帯を強めて外にまで広がり、国字のラテン文字化を成功させて国力を充実させている新生トルコ共和国と結びつくことを恐れた、これがスターリンのキリル文字復帰政策の理由の一つであると考えられる。

International Azerbaijan（Internet version）[9]に拠るならば、連邦内トルコ系民族でのラテン文字採用の歴史的経緯は次のようなものだった。1924年アゼルバイジャン共和国の首都バクーにボリシェヴィキ政権が樹立され、彼らはアラビア文字を廃し、ラテン文字で公文書を書くことを決定した。1926年第一回トルコ学会議がバクーで開かれ、全世界から集まったトルコ学者たちは、チュルク諸語の音組織の記述にはラテン文字が最適であるとの結論に達した。1928年、トルコ共和国の初代大統領アタチュルクAtaturkは、千年以上続いたアラビア文字による書記法を、修正を加えたラテン文字のものに置き換えた。1928年、モスクワに“Yeni Alif”（New Alphabet）という名の委員会が設けられ、ラテン文字化の問題が討論された。同年連邦内の六つの全トルコ系共和国（Azerbaijan, Turkmenistan, Tajikistan, Kazakhstan, Kyrghystan, Uzbekistan）に対してラテン文字が採用された。当時、この文字システムは、これらの民族間での意思疎通を促進している。かような立法措置は、トルコ系民族の文化的一体感を醸成することとなった。

この国語文字改革により、新生トルコ共和国での識字率は急激に上昇している。その明瞭な結果の一例は、召集兵士への兵器操作の教育訓練の効率向上と、彼らの戦闘技術の向上である。オスマントルコ時代の兵士はその殆どが文盲であった。オスマントルコに見られた状況と同様なものが帝政ロシアの軍隊に存在していた。文盲のロシア兵士の戦闘能力と士気の極端な低さは、第一次欧州大戦でのタンネンベルグ戦に如実に現れており、ただ一度の会戦で十万人が戦死している。その一方、ドイツ軍兵士は新兵の時すでに近代兵器の運用と戦技を教える教本を読むことができた。革命とその後の国内戦を戦いぬいたレーニンにとって、オスマントルコのアラビア文字に相当するものがキリル文字であった。ラテン文字採用により国民の識字率を急速に向上さ

9　Azerbaijan International, Summer 1997 [5.2](Internet version). Alphabet Transitions: The Latin Script: A Chronology. *Symbol of a New Azerbaijan*, by Tamam Bayalty.

せ、それによって軍隊と産業の近代化を一気に進めることが可能であると、レーニンは考えていたのである。

再び*Azerbaijan International* に拠れば、1930年代になって、スターリンはトルコ系民族のこの連帯をソ連体制に脅威を与えるものと考えるようになったという。彼は1939－1940年連邦内全トルコ系民族に Cyrillic scripts を強制している。更には、相互意思疎通を阻害する目的で、各チュルク語方言間に共通の音に異なる文字を割り当ててもいる。それ故に、例えば /ŋ/ は各共和国で別々の文字で表記されることになった。こうして、口語以外での文章語での意思伝達は困難なものにされたという。

１－３　初等読本の例文読解と解説

男女二人の児童の顔つきは私たち日本人と変らない。実際ケート人の容貌は、虹彩の色が淡い点を除くならば、日本人と変わらない。絵の犬はサモエード犬である。B5版58頁1200部印刷されたこの教本の表紙には以下のような記述があり、ラテン系文字の採用が共産党中央委員会レベルで決定されたことを示している：

НАУЧНО-ИССЛЕДОВАТЕЛЬСКАЯ АССОЦИАЦИЯ ИНСТИТУТА НАРОДОВ СЕВЕРА ЦИК СССР（ソヴィエト連邦中央執行委員会北方諸民族科学協会編）

BUKVAR（初等読本） N. K. KARGER didəŋuolbət（N. K. KARGERが書いた）

UCPEDGIZ（学校教育出版） MOSKVA 1934 LENINGRAD

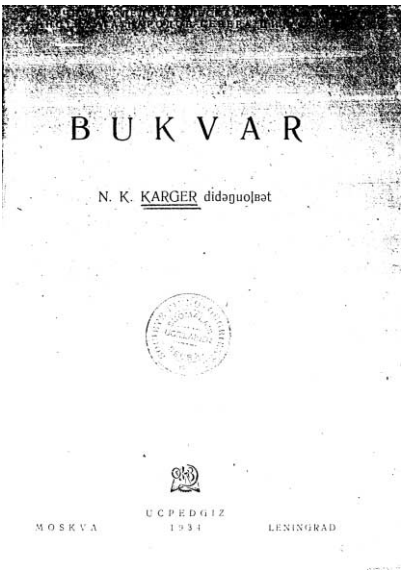
更にその裏には、上のケート語にロシア語で次の訳文が付けられている：

БУКВАРЬ НА КЕТСКОМ ЯЗЫКЕ（ケート語初等読本）

Н. К. КАРГЕР написал　N. K. Karger（N. K. KARGER 著）

ГОСУДАРСТВЕННОЕ УЧЕБНО-ПЕДАГОГИЧЕСКОЕ ИЗДАТЕЛЬСТВО

МОСКВА 1934 **ЛЕНИНГРАД**（国家学校教育出版 1934年、モスクワ・レニングラード刊）



女性教師と児童からなる頁である。ケートではスカーフは女だけの被り物ではなく、男もまた被るものである。極北では毛皮帽子が役に立つと思われるが、実は、それは労働には適さない。毛皮帽は少量の運動でも体温を上昇させ、冷却するには脱がざるを得ず、煩雑となる。体温を調節するには、この絵のように被り物を使う方が容易なのである。日本でも、本州秋田、青森の日本海側、および北海道全域で、漁師の男性はこの絵と同様にスカーフを被り、口をすっぽりとその端で覆う。

黒板の絵は、大鹿が二頭の犬によって逃走を抑制されている場面である。壁の絵の水鳥は水面から飛び立った瞬間であり、右手の方向にはおそらく仕掛けられた網がある。水鳥の捕獲にケートの猟師は散弾銃をあまり使うことをしない。銃猟は水鳥には効率が悪く、その上消耗品である火薬、散弾、薬莢などが高価であるからである。水鳥は湖水から追いたてられると一斉同一方角に飛び立つ習性をもち、その方面に捕獲網を展開しておくならば、それらを効率的に多数捕獲することが可能となる。水鳥は肉と羽毛を供給し、ともに本読本37頁に登場する kooperativ (co-operative)「協同組合」に納入される。

読本54頁に、ケート語音素の一覧として次のような字母表が掲載されている。

23個の一般的なラテンアルファベットとその修正文字４個、下書き / 、/、ロシア語軟音記号を転用した **ь**、及び Æ æ から成っている。先ず最初に注意すべきは三番目の C c の文字であるが、これは /ʧ/ である。読本の表紙に印刷された UCPEDGIZ の語が、ロシア語の **УЧПЕДГИЗ** に対応し、C の文字が **Ч**/ʧ/ の書き換えとなっていることからも、それがわかる。但し、読本49頁のタイトル　Bolnica　―これはロシア語の **Больница** ‘病院’に対応―の表記から推測されるが、c は **ц** [ʦ]と発音される場合もある。六番目の文字 **Ə** ə は mid-central vowel 中舌中高母音 /ə/ に対応する。九番目の文字 H h は velar-fricative voiceless 軟口蓋無声摩擦音 /x/ であり、十番目の **Ꝗ** ꝗ はその有声音 /ɣ/ である。十二番目は日本語のヂの音ではなくヤユヨの出だし音である approximant 滑脱音（半母音）/j/、即ちロシア語の **й** /j/ に相当する。 十七番目の文字 **Ŋ** ŋ は velar-nasal 軟口蓋鼻音 /ŋ/、二十番目 Q q は uvular stop voiceless 口蓋垂閉鎖音 /q/ である。二十七番目のハイフン重ね書き Z 文字は alveolar-affricate voiced 有声歯茎破擦音 /ʤ/ である。二十八番目の **Ƀ**　**ƀ** は母音を表わす文字であり、ロシア語の軟音記号 **ь** とは異なるので注意を要する。これは central-high vowel 中央高母音 /i/ である。

二十九番目の digraph（二字一音文字）Æ æ は英語に於けると同様に front-low vowel 前方低母音を示す。次の六つの文字の真下に書かれたコンマは、その子音が口蓋化されたことを示す。音声記号としては子音 C の右肩に表記される/C′/に対応する。最後の五母音に被せ書きされた“ ¯ ”記号は、その記号の下の母音が長母音であることを示す。読本54頁掲載の子音と母音を、今日の標準的な子音表に示す。自然音類を反映する美しい音韻表になることがわかるであろう。

ケート語子音文字

	唇	歯　茎	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂
閉鎖音	p　ʙ	t　d		k　g	q
摩擦音	f　v	s　z		h　ɦ	
鼻音	m	n		ŋ	
流音		l			
		r			
滑脱音			j		
口蓋化音			s’　l’		
			n’		
破擦音		z̲			

注意：この表で l’ n’ s’ は下書きコンマのついた L l N n S s に対応するものとし、z̲ はハイフン重ね書き Z z にそれぞれ対応するものとする。項目内の左は無声音、右は対応する有声音である。また読本で、カールゲルは声門閉鎖音を一貫して表記しない。読本54頁のアルファベット一覧にもそれに対応する文字はない、よって、上の表にはそれを表わさない。

ケート語母音文字

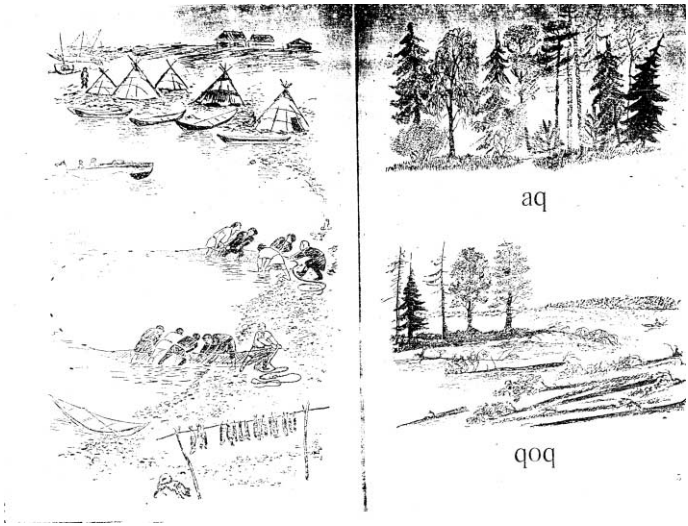
	前　方	中　央	口　奥
高	i　ī	ƀ	u　ū
中高	ə　ē	ə	o　ō
低	æ	a　ā	

右側の記号は長母音を示す

読本は53の章から成る。巻末にはロシア語の訳文が付されているが、それを参照し更に Aulis J. Joki 著 KETICA (I,II):Helsinki, 1955.[10] を基本文献として使い、各章の文章を読んでゆくことにする。しかし、テーマは伝統的な文化人類学題材に限定した。ソヴィエト連邦共産党の政治宣伝の部分は後の考察に委ねることとし、ここでは割愛した。

先ず絵を示し、その下に語彙の解説を続ける。語彙は斜字体とし KETICA での当該語彙の形を示す。“ S.数字 ” は頁の数字を意味するものとする。原則として KETICA掲載の見出し例のみを挙げ、随時他の研究をも引用し、適時解説を加える。最後に、ケート語例文の下に逐語的に日本語とロシア語の訳を置いた。

p.4-5



aq　**деревья**（針葉樹、広葉樹ともに）樹木。KETICA. S.16には *ak*… Baum; Holz. とある。ドゥリゾンの『ケート語』(1968)には、声門閉鎖音をもつ ʔaʔk ‘**дрова**’ ‘樹木’とある[11]。 *qoq*　**плавник** 流木 KETICA.には「流木」の意味では対応する語を発見できなかった。流木は集めて筏に組まれ、河を製材所まで運ばれる。

左頁の絵はケートの生活の基本が河漁労であることを示すものである。漁労は狩猟に次ぐ、ケートの重要な生業活動であった。挿絵には曳網漁をしている様子が描かれ

10　Donner K. *Ketica*.　Materialien aus dem Ketischen oder Jenissei-Ostjakischen//Mémoires de la Société Finno-ougrienne.　Vol. 108.　Helsinki, 1955.

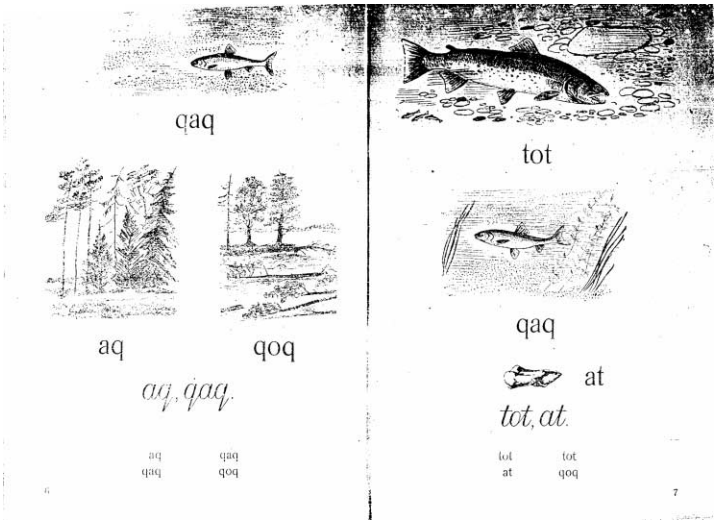
11　***Дульзон А. П.*** **Кетский язык. С.**48. **Издательство томского университета. Томск** 1968.

ているが、曳網はロシア人から取り入れた漁法であった。上左肩にはマストをもつ川舟が描かれているのが微かに見える。これはイリムカと呼ばれる家舟 house-boat である。舟上には寒さを防ぐために小屋が設えられている。

その下のテント群が雪解けの直後から春夏にかけて営まれる宿営地であり、漁場に設営される。ドイツ語ではユルテ Jurte と呼ばれる。この円錐形の幕舎は、まず柳の枝二本を地面に横並びに立て、次にそれらの枝の頂点を固縛して骨組みとする。この骨組みには、ケートの生活に欠かせない、軽量であり耐水性に優れた白樺樹皮が貼り付けられる。その大きさは接地面直径3～4m、高さ1.5mほどである。

その前にあるのは白樺製の平底舟である。タイガの自然水路をこれで航行する。障害物があるときは、川から引き上げ肩に担いで別の水路に入れる。更にその下には、川での曳網漁の様子が描かれている。下の絵は長期保存のため、魚が内蔵を抜かれ、天日に干されている様子である。魚は焼くか、油で揚げて食する。ケートのみならずシベリア諸民族での典型的生活の一場面である。

p.6-7

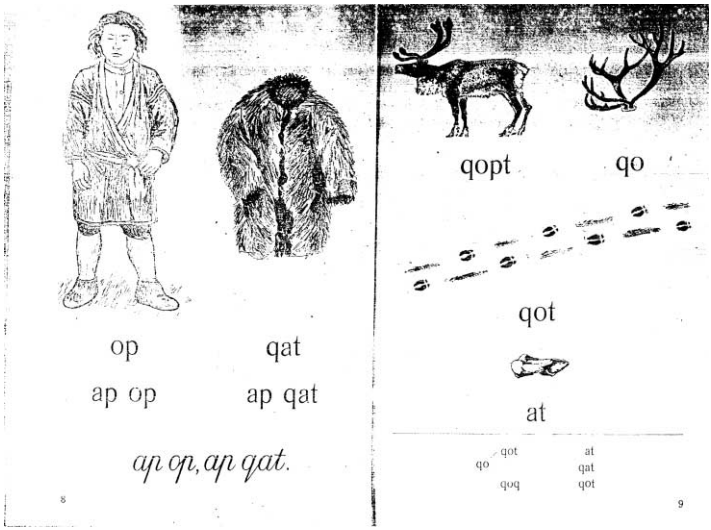


qaq **елец** デース（ウグイにちかい鯉科の淡水魚）KETICA. S.63には qak eine Fiscart「ある魚の種類」とある。ロシア語では**момчик.** aq 樹木（既出）qoq 流木（既出）。以下既出のものは省略する。

tot **таймень** イトウ KETICA. S.93　*tot* Njelma-Fisch, eine Art Lachsforelle, **нельма** 鮭科の魚、ネリマ（下村：コミ出身の友人はロシア語で **головатка** ‘扁平頭の魚’と呼んでいた）。ドゥリゾンの同書には、声門閉鎖音をもつto?t ‘**таймень**’とある。*at*

кость 骨　KETICA. S.19には *at* とある。ここで何故骨の断片が描かれているのか。ot と at の母音部の音韻比較を目的としたとも考えられるが、骨の名称を示す目的にしては、捩じ切られた不自然な形態で提示した、編者の意図が不明である。絵の骨はトナカイの脛であり、その内部の骨髄は貴重な食料である。彼らの食生活の一面を紹介したものであるのかも知れない。

p.8-9



op **отец** 父 KETICA. S.77, *op*; *ob* Vater.　*ap op* **мой отец** 私の父 KETICA. S.18 *ap* mein 私の。*qat* **парка**（**парка** は北シベリアに住む北方諸民族の）鹿皮製の上着。KETICA.S.57には *ka*ˀ*t*（ˀはドンネルの使う声門閉鎖音を示す補助記号）[kaʔt] Pelz 毛皮製のオーバー。また、ドゥリゾン同書では、やはり声門閉鎖音を含むkaʔt の形が挙げられている。*ap qat* **моя парка** 私の毛皮製上着。ここで再び骨 *at* の断片が描かれている。その理由が思い当たらない。上記と同じ理由によるものであろうか。

絵にはケート族特有の衣服が描かれているが、日本の半纏に似たもので、右前袷である。極北の生活には向かない温暖な地域の衣服を思わせるが、この点や伝承内容のもつ特徴から推測して、彼らの原郷が南方であると考える民族学者は多い。その一方で、衣服の高度の断熱効率は少ない労働による体温の急上昇をもたらすものであり、むしろ労働効率を低くするとの考えもある。この考え方に拠れば、労働の詳細を考えず、絵の衣服の表面的な構造からのみ判断して、ケートの故郷を南方の暖地とすることは早計ということになる。ロシア科学アカデミー民族学研究所収蔵資料に拠れば、ケートのこの膝まである上着は、裁ち方までも和服に似て、構成部分が全て直線で裁

断されている[12]。これは古くなったものを解して、端切れ同士を縫い付ける際に、無駄に棄てられる部分が少なくなるという大きな利点をもつものである。

p.10-11

qon **медведь** 熊 KETICA. S.67 *qoj* Bär 熊。ただし、頁68には、1 *qon* Knorpel 軟骨、2 *qon* Glasperle ガラス玉、3 *qon* die Birkhühner クロライチョウ、の三形が挙げられているが、その何れも直接熊を意味するものではない。ただし、軟骨がガラスのように透き通って見える食べ物であることを考えるならば、前二者は関係付けられよう。

ケートは日本のアイヌ民族と同様に熊霊儀礼 bear-cult〜bear-wake を行う。しかし、アイヌ民族の儀礼イオマンテとは異なる点がある。アイヌでは仔熊を育てた場合は、それが成獣になった時点で殺し、霊を熊の霊の国がある東方の天へ送り返す：イi それ‘熊’＋オマンテ omante 送る。ケートでは母熊の殺された仔熊を人里に連れ帰り、自分の「娘」や「息子」として育て、大きくなると狩猟に伴い、野生の熊の居所を知らせる案内とする。そして三歳になると、様々な装飾を施して山に帰す。この熊の飼い主は決してそれを狩ることをせず､仲間にもこの熊を狩らないようにと頼むのである。また、ケートが儀礼を行うのは狩猟で獲得した熊に対してのみであり、飼育した熊にはすることがない[13]。因みに、朝鮮語ではコム、日本語ではクマであり、音声的にはケートのコンに近いのである。*tap* **собаки** 犬 KETICA. S.88 *ta'p* [taʔp] die Hunde 犬たち. 単数は *t'ip*（[’]は口蓋化記号）。

12 ***Алексеенко Е. А.*** **Кеты. С.** 132. **Издательство «Наука». Ленинград** 1967.
13 大林太良『北方の民族と文化』頁175-176。 1991 東京。 山川出版社

犬は輸送手段としては使われなかったが、夏季に二、三頭で河岸沿いに家舟 house-boat を曳かせるために使役されることがある[14]。冬季北部のケートは狩猟行に犬橇を使うが、狩猟者自身は橇には乗らず、スキーを履いて牽き犬に手を貸すのである（読本27頁挿絵）。通常は狩猟者自らが橇を牽く。犬は飼い主が死ぬと殺され、飼い主の墓に伴葬されることがある。

幕舎が描かれているが、冬でも使われる。覆いは白樺の表皮を草糸で綴じ合わせたものである。内部には炉がきってあり、冬は鉄製ストーブが置かれる。内部はつねに煙っており、そのためか眼疾が多い。

Ap　　*op*　　*oon.*
私の　父が/は　でかけた
Мой　отец　ушёл.

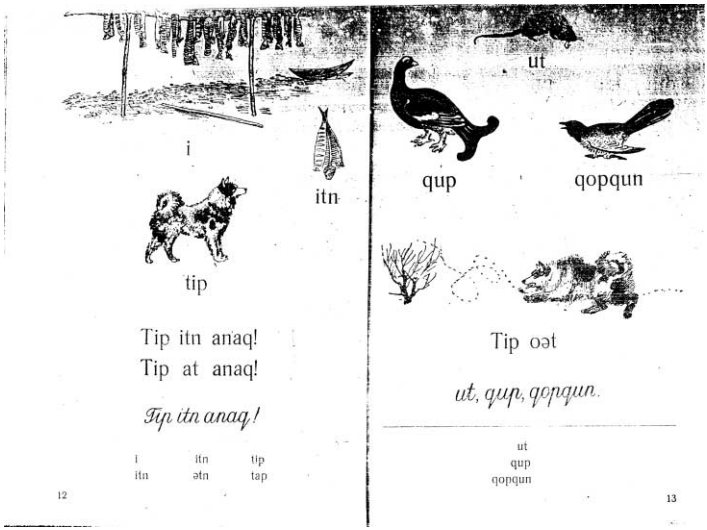
oon（歩いて）行った KETICA. S.76 *ogət*　er geht それは（歩いて）行く; *ogon*　er ging それは（歩いて）行った。*oon* という母音の連続した形は過去形の異形 *ouʏon* に由来するものであろう。*ətn*　**лягушки** 蛙 KETICA. S.43　*ə*^{7}*l* [əʔl] Frosch 蛙。 *ətn* は複数形である。*tə* **окунь** カワスズキ（淡水魚）（下村・伊藤：緻密な鱗の硬い皮をもつ美味な小魚である）。ドゥリゾンの前掲書には **тъ**ᵊ? ―発音は[チァッ]か―という音声学徒にとっても意味不明の表記が与えられ、声門閉鎖音を含むものとして扱われている。KETICA. S.89　*tə*^{7}*a* [təʔa] *tə*^{7}*ə* [tə ʔə] Barsch ペルカ（スズキに似た淡水魚）。qon 熊（既出）。 qot 足跡（既出）。

Anə　　*oon?*　　*Qopt*　　*oon.*
誰が　行ったのか？　　雄（鹿）が　行った。
Кто　шёл?　　***Бык　шёл***.

anə　**кто** 誰が KETICA. S.18 *ane anə* was?, wer? 何が、誰が。

14　前掲 Popov & Dolgikh 論文。　頁611。

p.12-13



i **Вещала для юколы**. 干し魚製造用木の桟 KETICA. S.54 *ji*[7] [jiʔ] Gestell zum Trocknen von Fischen 魚を干すための台架。*itn* **юкола** 干し魚 KETICA. S.55 *jitn* getrockneter Fisch 干し魚。 *tip* **собака**（一匹の）犬 KETICA. S.95 *t'ip* Hund 犬（既出）。*anaq* KETICA.では発見できなかった。

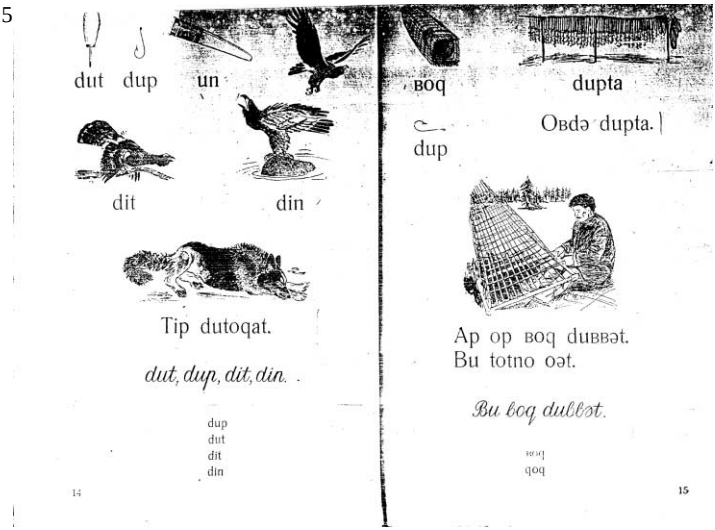
Tip	*itn*	*anaq!*	*Tip*	*at*	*anaq!*
（その）犬に	*干し魚を*	*やれ！*	*（その）犬に*	*骨を*	*やれ！*
Собаке	***юколу***	***дай!***	***Собаке***	***кость***	***дай!***

ut **крыса** クマネズミ KETICA. S.97 *uoty* Ratte. *qup* **пальник** クロライチョウ KETICA. S.70 qup Birkhuhn クロライチョウ（下村・伊藤：シベリアの大型雷鳥で、特有の尾羽は成熟の段階で様々に変化し、それに応じて固有の名称がある）。*qopqun* **кукушка** カッコウ KETICA. では発見できなかった。ケートにはその胞族が特定の動物と関係を維持する信仰、つまりトーテミズムが見出される。例えば、郭公や鷲はあるケートの氏族と抽象的に結合した特別のトーテム動物となっているだが、その胞族構成員は自分の同胞族のトーテム動物である郭公や鷲を殺してはならない[15]。

Tip	*oət.*
犬が	*行く*
Собака	***идёт***.

15　前掲 Popov & Dolgikh 論文。　頁616。

p.14-15



dut **пило** 錐　KETICA.には発見できなかった。 唐突に錐が登場する理由が不明であるが、幕舎の樹皮覆いを綴じ合わせる針糸を通す孔をあける用具である。*dup* **уда** 釣竿（下村・伊藤：これは誤りであろう。正しくは **рыболовный крючок** 釣針）KETICA. S.39 *du'p* [duʔp] eiserner Angelhaken 鉄製釣針。　*un* **ножны** 鞘　KETICA.には発見できなかった。*dit* ← KETICA. S.41, *dit*　Auerhahn　**глухарь** キバシオオライチョウ。 qup ← KETICA. S.70, *qup, kup, γup*　Birkhuhn　複数 *kγuon*　**пальник** クロライチョウ。 *din*　**орлы** 鷲　KETICA. S.40　d'i[7] [d'iʔ] Adler　鷲。 ドゥリゾンは前掲書で **ди**? '**орёл**' としている。ケートでは鷲もまたトーテムであり、特定の氏族と結合した特別の鳥であって、これを殺してはならぬとする禁忌が存在する[16]。

Tip　　*dutoqat.*
犬が　　ねている
Собака　　спит (лежит).

dutoqat　KETICA. S.39　*dutogət*　er schäft それはねている。 ***в****oq* [boq] **морда** 魚簗 KETICA. S.24　*bok* aus Ruten geflochtene Reuse für Aalen　鰻採りのための柴で編んだ魚簗。*dupta* **перемёт** 敷網（下村・伊藤：この絵は敷網ではなく実は延縄を描いている）KETICA. S.39　*duptə* Angelleine, Grundschnur (am Jenissei von den Keten und Russen verwendet) 「ケートやロシア人がエニセイ河で使う、魚を釣るために地面に敷いて使う紐」とある。*duptə*　は *dup* '釣針'+ *taat* '沈網'に由来するように思われる。

16　同論文同頁。

漁労は狩猟に次ぐ重要な生業である。特に北部のケートは狩猟に比べて漁労への依存度が高い。南部では長い縄に三十から四十もの釣針の下がった延縄（読本14頁挿絵）を使うが、他方北部では縦長の網（読本15、33頁挿絵）を使う。これらの漁具は基本的に個人の所有物であったが、個人のほかに所有者の所属する集団によっても使用された。

漁法は季節によって異なる。春季と夏季には、小川の流れを塞き止め、自然地形を利用し、葦簾を埋けた誘導水路を作る。魚はそれによって簗や網に誘い込まれる。秋季には白樺の樹皮（読本31頁挿絵）を燃やす松明を水面に掲げ、二三人して舟上より銛で刺し突く。結氷する冬季には氷に孔をあけ、そこから網を入れたり（読本15頁挿絵）、釣り竿を使い漁を行う（読本14頁挿絵）。捕獲した魚は串焼きにするか、干し棚で乾燥させて干し魚とし、冬用の保存食とする。その他に、草の葉の間に魚を挟み、それを地面に埋けて醗酵を促し、骨までもが柔らかくなったあとで食する醗酵食品もつくる。

Oвdə　duptə.

父の　延縄

Отца перемёт.（父の　敷網）

ob［S. *op*.］ KETICA. S.75 Vater 父

Ap　op　вoq　duввət.

私の　父は　魚簗を　つくっている

Мой отец морду делает.

ap［S. *ab*］ KETICA. S.18 mein 私の KETICA. S.38 *dubbet*, *duввət* er macht, verfertigt 製造する。

Bu　totno　oət.

彼は　イトウ漁に　ゆこうとしている

Он тайменя (промышлять) пойдёт.（彼は　イトウを　獲りに　ゆく）

вu KETICA. S.26 *bu* er, sie 彼（女）は。*totno* イトウ漁に。

p.16-17

вit [bit] **гагара** カイツブリ　KETICA. S.23 *bjit*　Polaraucher, **гагара**, Colymbus arcticus. カイツブリはシャーマン鳥と看做され、その皮から製作した袋物は男性の所有物であった[17]。***вən*** [bən] **утка** 鴨 KETICA. S.22 *bən* Ente 鴨。 ***воŋtu*** [boŋtu] **сельдь** 鰊 KETICA. S.25 *boŋtū*　eine Art Lachs, **залётка**. eine Art Lachs 鮭科とあるが絵は明らかに鮭科の魚ではない。 **залётка** ザリョートカについては不明。似た言葉に **селётка** セリョートカ ‘塩漬鰊’ があるが、Lachs ‘鮭’という説明と一致しない。

Bən　　*uta*　　*oŋət.*

鴨が　　*上を*　　*飛んでゆく*

Утки　　***вверх***　　***летят***.

KETICA. S.98には *ūtə* は nach Süden ‘南へ’という意味しか挙げられていないので、「鴨が　南へ　飛んでゆく」の可能性もある。

Ətn　　***вənno***　　*oŋət.*

私たちは　　*鴨（猟）に*　　*ゆく*

Мы　　***уток (промышлять)***　　***идём***.

oŋət および *oŋət* はKETICA.では発見できなかった。

教科書欄外の

Bu　　*oət*　　*Buŋ*　　*oŋət*

彼は　　*ゆく*　　*彼らは*　　*ゆく*

Он　　***идёт***　　***Они***　　***идут***

17　***Алексеенко*** 前掲書。頁117。

の二文は、主格名詞が複数になると、主語と述語動詞語幹中に *ŋ* が登場するという規則を分かりやすく示している。*eŋquŋ* **деревня** 集落 KETICA.では発見できず。但し、*quŋ* は‘幕舎’を意味する：KETICA. S.70 *quŋ* die Jurten, die Zelte ‘幕舎、テント’（単数形は *kuos*）。ケート語で‘集落’とは‘幕舎の集まり’を意味したのかも知れない。

ケートの白樺皮製天幕は接地面直径が3～4mあるが、その樹皮覆いは tiski といい、縦横1m×3mもある。木材で補強されていることもあるが、軽量であり脂に富む樹皮であるゆえに耐水性に富んでいる。入り口には白樺樹皮製のカーテンが下がり、それには様々な装飾が施されている。内部にはその真ん中に囲炉裏がきられており、その上には三本の枝が交叉して立てられ、頂点から吊り鉤が掛けられ、それに大鍋や湯沸しが吊るされる。夏季には漁場の近くに天幕が設営されることがある。その場合、骨組みの組み方が異なり、更には炊事の火は外で熾される。北部のケートの幕舎は鹿皮で覆われ、内部には鉄製ストーブが設置されている。

de **озеро** 湖　KETICA. S.30 *dē*　der See 海、湖沼

Dediŋtə　　***В****ən*　　*onaŋ.*

湖には　　*鴨が*　　*多い*

На озере уток много.

dediŋtə および *diŋtə* の形はKETICA.では見つけられなかった。 *onaŋ* はKETICA. S.77 に *ōn* viel ‘多くの’とある。

Bəndə　əŋ.

鴨の　卵

Утки яйца

KETICA. S.41 *e⁷j* [eʔj], *je⁷j* [jeʔi] Ei, Vogelei　‘鳥の卵’；S.42　*ēŋ* die Eier ‘複数の卵’。

Ətna　　*deŋ*　　***В****ənno*　　*oŋət.*

私たちの　　*人々は*　　*鴨（猟）に*　　*ゆく*

Наши люди уток (промышлять) идут.

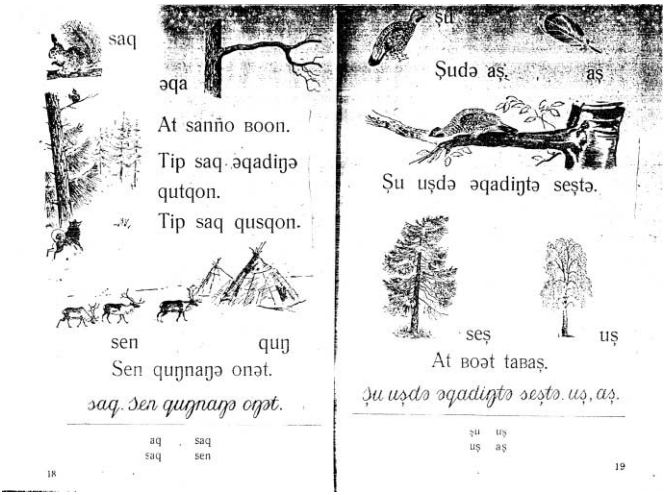
deŋ KETICA. S.40 *d'eŋ*, S.36 *djeŋ* die Menschen ‘人々’。なお単数はケートという名前の起こりの *ket* (KETICA. S.36, S.57)である。

Buŋ　　*dediŋə*　　*oŋət.*

彼らは　　*湖へ*　　*ゆく*

dediŋə の形はKETICA.に発見できなかった。

p.18-19



saq **белка** リス KETICA. S.79 *saʔk* [saʔk] Eichhorn リス。但し、ドゥリゾンは前掲書で声門閉鎖音を含むとして saʔk と表記している。

リス猟はケートに於いては、重要な位置をもつ。毛皮のみならずその肉を食用にする。毛皮を傷めないように、打撃のみを与えるべく成型された、太く鈍い木製あるいは角製の鏃を使う。この鏃には側面に複数の孔が彫られ、弓から放たれたとき、独特の音を発する。犬がリスを樹上に追い上げたとき、その矢は放たれる。

捕獲される動物の80%から90%をリスが占める。リス猟は北にゆくにつれてその重要度を減らす。因みに、東北日本のマタギはリスの肉ではなく、尾の毛を炙り焼きしたものを美味とするが、沿海州のトゥングース系民族も同様である。*əqa* **сук** ‘大枝’の意味では KETICA. には見あたらないが、ドゥリゾンには声門閉鎖音を含む ʔaʔk '**дрова**' ‘木’という語がある。

*At　　sanno　　**в**oon.*

私は　　リス(猟に)　　出かけた

Я　белок (промышлять) пошёл.

Tip　　saq　　əqadiŋə　　qutqon.

犬が　　リスを　　大枝上に　　いすくめた

Собака　белку　на　сук　загнала.

qutqon ←（?）KETICA. S.62 *kuos* nehmen, festnehmen 拘束する、留置する。

Tip　　saq　　qusqon.

犬は　　リスを　　怖がらせた

Собака　белку　испугала.

qusqon ←（?）KETICA. S.69 *qostət* sich fürchten 怖がる。*sen* **олени** トナカイ（複数の） KETICA. S.80 *se⁷n* [seʔn] die Reinntiere トナカイ（複数形）単数形は *sjel* 。トナカイは荷運びのための動物である。

トナカイは大切な動物であり、革命前はケートの約40％の世帯がこれを飼育していた。トナカイは冬の輸送手段である。しかし人がそれに騎乗することはなく、橇を牽引するのに使用した。トナカイ飼育の起源はサヤン・アルタイ山地にあると言われ、馬に騎乗する風習が野生鹿に応用されて始まった。当然、騎乗の方が古い時代の痕跡であり、その非効率性のゆえに橇牽きに転換されて、シベリア北方に伝播したらしい。

この動物は、春になって輸送手段としての用途がなくなると、森林内に自由に放たれた。そして人間の監視を受けない場所で出産期を迎え、子供を産んだ。その肉や内蔵から眼球、骨、皮、角、蹄、腱に至るまで、食用や様々な用途に利用された。

quŋ **чумы** 幕舎（既出）

Sen　*quŋnaŋə*　*onət.*

鹿は　*幕舎のほうに*　*ゆく*

Олени к чумам идут.

su **рябчик** えぞらいちょう KETICA.には見当たらず。*as* **перо** 羽茎 KETICA. S.18 *as* Feder, Daune 羽毛。

Su　*usda*　*əqadiŋtə*　*sestə.*

えぞらいちょうは　*白樺の*　*枝に*　*座っている*

Рябчик на суку берёзны сидит.

usda ← *us* KETICA. S. 97 Birke 白樺。*sestə* ← KETICA. S.83 *sjest(e)* sitzen うずくまっている。*ses* **лиственница** 針葉樹。*us* **берёза** 白樺。

At　***в****oət*　*ta****в****as.*

私は　*行く*　*犬たちとともに*

Я иду с собакой.

*ta****в****as* ← KETICA. S.95, *tip* の複数 *ta⁷p* [taʔp]か。

p.20-21

loqtaq **голицы** ‘革手袋’とあるが、絵は‘かんじき’を指している。この雪上歩行用具はその裏が滑り止めの毛皮で覆われており、それ故に‘革手袋’と同義なのであろう。かんじきは冬季の狩猟に履かれるが、柔らかい雪質に応じての幅の広いものと、硬く締まった雪質用の幅の狭いものとがある。その接地面には逆滑りを防ぐためのライナーが張られている。KETICA. S.73, *logtak* hölzerner Ski 木のスキー。

*At　loqtaqas　asseno　**в**oon.*
私は　かんじきをはいて　猟に　出かけた
Я　на голицах　зверя (промышлять)　пошёл.
獣（猟）に

asseno ← KETICA. S.19, *assəno* auf die Jagd 猟に.

Tip　saq　usdiŋə　qutqon.
犬は　リスを　白樺の木の上に　いすくめた
Собака　белку　на берёзу　загнала.
追い詰めた

Saq　usdiŋtə　dasesta.
リスは　白樺の木に　座っている
Белка　на берёзе　сидит.

dasesta ← KETICA. S.38, *dug(j)en* ‘座る’か。

*Bu　tipdaŋə　da**в**uŋsoqot.*
彼女は　犬を　見ている
Она　на собаку　смотрит.

вu **она** 彼女は KETICA. S.26 er, sie 彼は、彼女は。*da**в**uŋsoqot* KETICA.には見当たらず。*sel* **олень** 鹿　KETICA. S.81, *sel* Renntier トナカイ

Oin　　oət　　senas.

オイン(男の名)は　行く　　鹿で

Оин　　едет　　на оленях.

oət ← KETICA. S.76, *ogət* ～*ouuγt*　er geht　彼は行く。*senas* ← KETICA. S.81, *seʔn* [seʔn] die Renntiere　鹿たち。トナカイ橇に乗った人物のもつ長い竿は、トナカイの尻を突くもので、これによって走る方向の制御を行うのである。この方法はトナカイ橇をもつシベリア諸民族全てに共通である。

Stepan　　oət　　loqtaqas.

ステパン(人名)は　行く　　かんじきで

Степан　　едет　　на голицах.

loqtaqas ← KETICA. S.73, *logtak* hölzerner Ski 木のスキー。今日とは異なり、スキーのストックは一本である。

*Sildan　　uət　　ta**в**as.*

シリダン(女の名)は　旅に出る　　犬で

Сильдан　　едет　　на собаках.

uət ← *uγət*　KETICA. S.24, *bogut* gehen, wandern, fahren, reisen, **уехать** 行く、旅をする、乗ってゆく、旅に出る、去る。

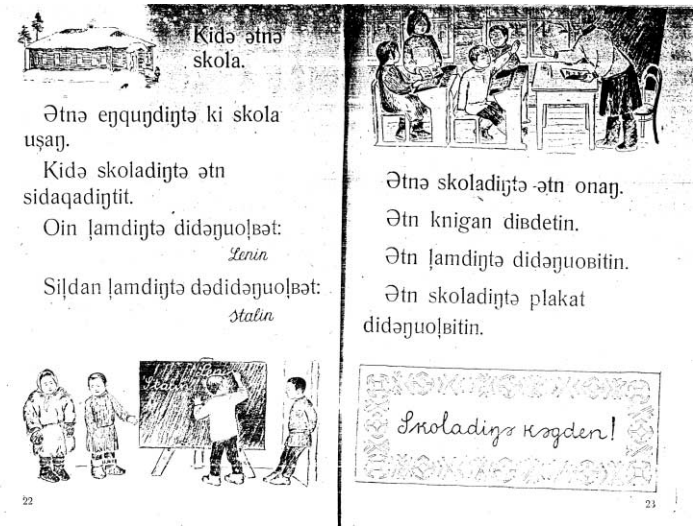
***В**ilas　　**в**uŋ　　oŋət.*

どこへ　彼らは　行く

Куда　　они　　идут?

***в**ilas* ← KETICA. S.22, *bilas* wohin? どこへ。 ***в**ung* ← KETICA. S.26, *bu* er, sie 彼は,彼女は；*buŋ* 彼らは、彼女らは。

p.22-23



Kidə ətnə skola.

Ətnə eŋquŋdiŋtə ki skola uṣaŋ.

Kidə skoladiŋtə ətn sidaqadiŋtit.

Oin ḷamdiŋtə didəŋuoḷbət:

Lenin

Siḷdan ḷamdiŋtə dədidəŋuoḷbət:

Stalin

Ətnə skoladiŋtə ətn onaŋ.

Ətn knigan diвdetin.

Ətn ḷamdiŋtə didəŋuoвitin.

Ətn skoladiŋtə plakat didəŋuoḷвitin.

Skoladiŋə kəgden!

22　　23

kidə ← KETICA. S.58, *kide* dieser この。*ətnə* ← KETICA. S.43, *ət* wir 我々は。*skola* ‘学校’という重要な単語はドンネルには存在しない。ドンネルがケート調査に出掛けたのはロシア革命の前1912年のことであった。当時のケートの人々に学校なるものは存在していなかったのである。*ki* ←KETICA. S.71, *ke* neu 新しい。*usaŋ* ←KETICA. S.98, *usa* ist, wird 在る、～に成る。 *sidaqadiŋtit* ← KETICA. S.80, *sebbede* lernen werden ‘習得する’か。*dədidəŋuolвət* ← KETICA. S. 31, KETICA. *ə* nun ‘さらに’+ *didəŋuolвət* か。*lamdiŋtə* ← KETICA. S.72, *lem, lim* Brett 板。*onaŋ* ← KETICA. S.77, *on, ony* viel, viele たくさん。*knigan* ← ロシア語の **книга** kniga ‘本’の複数。ドンネル辞書には *kn-* 開始の語彙はない。*didəŋuolвət* ← KETICA. S.32, *dideŋ-uksebet* schreiben 書く。*kəgden* ← KETICA. S.57, *kə*ˀ*j* [kəʔj] gehen 行く。

Kidə　　ətnə　　skola.

この　　私たちの　　学校

Вот　　наша　　школа.

ətnə　　enqundiŋtə　　ki　　skola　　usaŋ.

私たちの　　村に　　新しい　　学校が　　ある

В нашей　　деревне　　новая　　школа　　есть.

Kidə　　skoladiŋtə　　ətn　　sidaqadiŋtit.

この　　学校で　　私たちは　　学ぶ

В этой школе　　мы　　учимся.

Oin lamdiŋtə didəŋuolвət : Lenin
オインは 黒板に 書いた：レーニン
Оин на доске написал : Ленин.

Sildan lamdiŋtə dədidəŋuolвət : Stalin
オインは 黒板に さらに書いた：スターリン
Сильдан на доске ещё написала : Сталин.

ətnə skoladiŋtə ətn onaŋ.
わたしたちの 学校に わたしたちは たくさん
В нашей школе нас много.

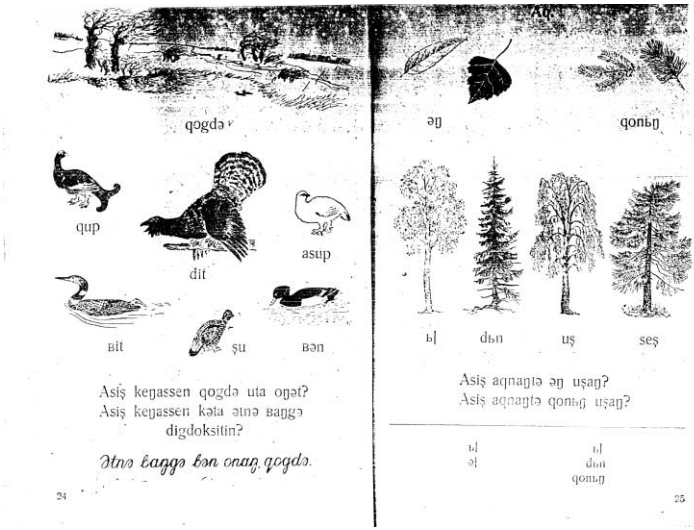
ətn knigan diвdetin.
わたしたちは 本を 読む
Мы книги читаем.

ətn lamdiŋtə didəŋuolвitin.
わたしたちは 黒板に 書く
Мы на доске пишем.

ətn skoladiŋtə plakat didəŋuolвitin.
わたしたちは 学校で プラカードを 書いた
Мы в школе плакат напсали.

Skoladiŋə kəgden!
学校へ 行きなさい

24-25



qogdə ← KETICA. S.67, *qogdə* Herbst **осень** 秋. *asup* ← KETICA. S. *asəp* Rebhuhn 複数は *asun* **куропатка**（日本名）シャコ。ここに描かれた鳥は肉と羽毛、様々な袋物を作るための皮を提供する。*asis* ← KETICA. S.19, *assa was*? どんな。*uta* はこの教科書には **вверх** ‘上空を’とあるが、ドンネルには *utə* KETICA.S.98, nach Südenとある。*kəta* ← KETICA. S.58, *kət* Winter 冬。***в***a*ŋgə* ← KETICA. S.20, *baŋ* Erde土地。*digdoksitin* ← KETICA. *digədak* wohnen 泊まる、留まる。

Asis	*keŋassen*	*qogdə*	*uta*	*oŋət?*	
どんな	*鳥が*	*秋に*	*南に向かって*	*飛び去るのか*	
Какие	***птицы***	***осенью***	***на юг***	***улетают*** *?*	
Asis	*keŋassen*	*kəta*	*ətnə*	***в***a*ŋgə*	*digdoksitin?*
どんな	*鳥が*	*冬に*	*わたしたちの*	*地に*	*留まるのか*
Какие	***птицы***	***на зиму***	***в нашей***	***земле***	***остаются*** *?*

ətnə	***в***a*ŋgə*	***в***ən	*onaŋ.*
わたしたちの	*土地には*	*鴨が*	*たくさん*
В нашей	***земле***	***уток***	***много*** *.*

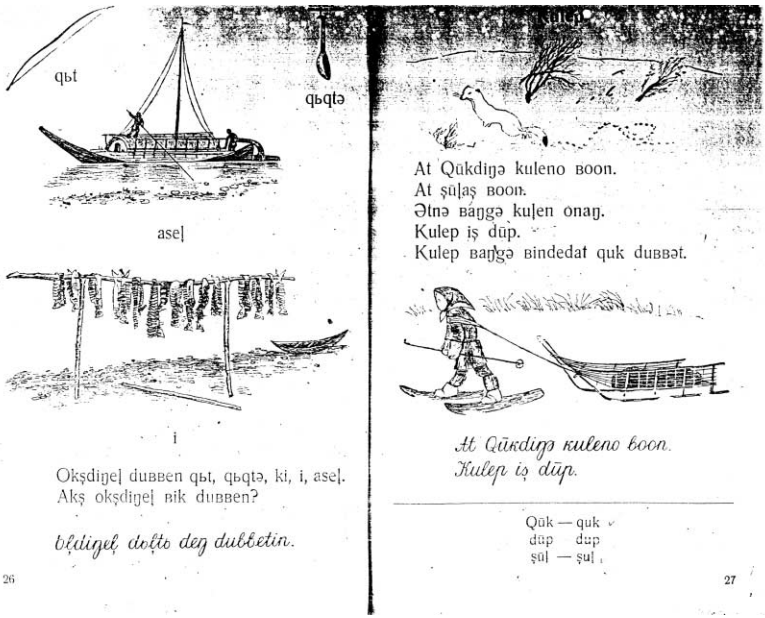
qogdə *о* ***сень*** *秋*

aq KETICA. S.16, *ak* Baum; Holz. 樹木、森。*əŋ* **листья** 広葉樹の葉。 KETICA.では特定できなかった。*qon**ьŋ*** **хвоя** 針葉樹の葉。KETICA.では特定できなかった。***ь*** *l*（母音記号 **ь** はロシア語の母音ィイ **ы** に似た音を示す）[ɨl] **осина**（ポプラの一

種）やまならし, ハコヤナギ, ユダの木。 KETICA. S.53, *yl*（ドンネルは yを [i] の音色の母音に充てている）Espe ハコヤナギ。 *dьn* [din] **ель** トウヒ, ハリモミ, エゾマツ。KETICA. S.35, *dyn* Fichte　ドイツトウヒ。 ドゥリゾン前掲書では声門閉鎖音をもつ **ди**ʔ**н** '**ель**' とされている。*us* **берёза** 白樺。KETICA. S.97, *us* Birke 白樺。 *ses* **лиственница** カラマツ。KETICA. S. 81, *ses* Lärche カラマツ。*əl* **лягушка** KETICA. S.43, *əʔl* [əʔl] Frosch 蛙。KETICA. S.53, *ynčə* [inʧə] Frosch 蛙。ここで蛙を掲載するカールゲルの意図は何であったのだろう。ケートが蛙を食するのか、筆者等には不明である。

Asis	*aqnaŋtə*	*əŋ*	*usaŋ?*
どんな	*木々に*	*広葉は*	*あるか（広葉をもつのは　どんな木々か）*
У каких	***деревьев***	***листья***	***есть*** *?*
Asis	*aqnaŋtə*	*qonьŋ*	*usaŋ?*
どんな	*木々に*	*針葉は*	*あるか（針葉をもつのは　どんな木々か）*
У каких	***деревьев***	***хвоя***	***есть*** *?*

p.26-27



qьt [qit] **кыг лук** 弓 KETICA. S.66, *qyt* Bogen。　但し、ドゥリゾン前掲書は声門閉鎖音をもつ **кыʔт** '**лук**' としている。ケートの弓矢―腐敗した魚の油から製した毒が塗られた―はセリクープのそれとともに“オスチャク弓”の名で北エニセイでは有

名であり、唯一ヤクート弓がそれに匹敵したという[18]。しかし筆者等には弓よりも矢の方が興味をひくものである。ケートを初めハント、セリクープ等のサモエードは時には鳴鏑を使うからである。これはマンモスの牙から削り出した骨鏃であり、鏃の側面には共鳴孔として働く抉りが複数付いている。矢は弓から放たれると飛翔方向に独特の音を曳きながら飛んでゆく。この鳴り物の仕掛けは獲物を驚かすためと説明されている。狩猟では矢が尽きた時が終わりであり、獲物に当たらなかった矢は苦労して回収される。筆者等（下村・伊藤）は、これは獲物に矢が当たらなかった場合、貴重な矢が落ちた場所を突き止め易くするためのもの、と考える。また、ケートの矢筒は蓋付きの木製の平らな箱であるが、アイヌの矢筒イカヨップとよく似ている[19]。

弓矢は夏季の野鳥の捕獲や、冬季のリス猟に使われた。またリスとヤマシギ猟には犬を使っている。クロテン猟は網によって行われる。毛皮を傷つけないためである。散弾銃の登場により弓矢は狩猟に使われることが殆どなくなった。また男児が誕生したとき、狩猟者としての成功を保証する目的で、その傍らには弓矢が生後間もなく置かれた[20]。

qьqtə [qiqtə] **ложка** さじ KETICA. S. 66, *qyqty* [qiqti] Löffel. *asel* KETICA. S.18, *asəl* grosses gedecktes Boot 大きい覆いのある舟 **илимка** 楡の舟。絵からも分かるように長さが十数米あり、小屋が設えられている。この家舟はケートの他に、ロシア人も製作する。 *i* KETICA. S.54, *ji*[7] Gestell zum Trocknen von Fischen. 魚を干すための桟、 *jitn*を参照せよ。**вешала** 桟。*oksdiŋel* 木から ← *oks* KETICA. S.76, *oks* Baum 木 **дерево** 木。*duввen* つくる ← *dibbet* KETICA. S.38, machen, tun, verfertigen 製作する。*ki* KETICA. S.71, Falle, Dohne zum Fangen von Auerhähnen und Birkhühnern 落とし穴、雷鳥を獲る鳥罠 **пасть**（方言・狩猟）捕獲用の罠。*aks* KETICA. S.17, was?（疑問詞）何 **что**. *вik* **ещё**, **другое** 他に、他の。KETICA.に発見できず。

Oksdiŋel	*duввen*	*qьt*	*qьqtə*	*ki*	*i*	*asel*
木から	つくる	弓と、	さじと、	罠と、	桟と、	舟とを

Из дерева делают лук, ложку, пасть, вешалу, илимку.

Aks	*oksdiŋel*	*вik*	*duввen?*
なにを	木から	さらにほかに	つくるか

Что из дерева ещё (другое) делают?

18　前掲 Popov & Dolgikh 論文。頁609。

19　***Алексеенко*** 前掲書。 頁56。

20　Thornburg L. P. *The Ket*: a contribution to the ethnography of a central Siberian tribe. Michigan University Microfilms International. Ann Arbor 1967.

ɨldiŋel *dɨltɨ* *deŋ* *duʙʙetin.*
やまならし（はこやなぎ、ユダの木）から *舟を* *ひとびとは* *つくった*
Из осины ***ветку（лодку）*** ***люди*** ***сделали***.

kulep **горностай** おこじょ。KETICA.に発見できず。*quk* KETICA. S.70, der Jenissei エニセイ河。*sūl*（ū は長母音）KETICA. S.85, Hundeschlitten 犬（トナカイ）橇 **нарта**. *is* KETICA. S.52, Fisch 魚 **рыба**. *dup* 食いつく（？）。‘食べる’ではKETICA. に発見できず。 *dūp*（ū は長母音） **ест** ‘食う’と *dup*（uは短母音） **уда** ‘釣針’との対立は弁別的である。 *duʔp* [duʔp] KETICA. S.39, eiserner Haken 鉄の鈎, eiserner Angelhaken 鉄の釣針。同項に「釣竿」は *duobd oks Angelrute* とある。*sul*（uは短母音）KETICA. S.84, Blut 血。 *ʙaŋə* ← *baŋ* KETICA. S.20, Erde大地 **земля**. *binde* KETICA. S.23, selbst 自分の。*quk* KETICA. S.70, Loch 穴。

At *Qukdiŋə* *kuleno* *ʙoon.*
わたしは *エニセイ河で* *おこじょを* *（獲りに）いった*
Я ***на Енисей*** ***гороностаев*** ***（промышлять）пошёл***.

At *sulas* *ʙoon.*
わたしは *橇で* *出掛けた*
Я ***с нартой*** ***пошёл***.

ətnə *ʙaŋgə* *kulen* *onaŋ.*
わたしたちの *土地には* *おこじょが* *多い*
В нашей ***земле*** ***горностаев*** ***много***.

Kulep *is* *dup.*
おこじょは *魚を* *食う*
Горностай ***рыбу*** ***ест***.

Kulep *ʙaŋə* *bindedat* *quk* *duʙʙət.*
おこじょは *地中に* *自分の* *巣穴を* *つくる*
Горностай ***в земле*** ***свою*** ***нору*** ***делает***.

p.28-29

ʙatat **лицо** 顔 *batət* KETICA. S.21, Gesicht. *dulek* **мыть** 洗う *dulək* KETICA. S.38, waschen. *aqtə* **хорошо** 上手に *aqtə* KETICA. S.17, gut. *selə* **плохо** 下手に *sel* KETICA. S.80, schlecht. 上の右側の絵では、口に含んだ水を吐き出しながら、少年はそれで手を洗っているのである。 *ōŋdu* **здоров** 健康である。KETICA.には発見できず。 少年の手にしている弓は鼬などの小型毛皮獣を捕獲するための仕掛け弓である。 *destьŋ* [destiŋ] **глаза** 目 *des* KETICA. S.31, Auge. *adat* **болят** 痛む、 病む *adat* KETICA. S.15, (es) schmerzt, (es) ist krank. ケートばかりではなく、天幕生活では内部の炉で生木を燃やすことが多く、その内部は始終煙っており、かれらに眼病が多いのはこの居住環境のせいだと言われている。

Oin ***ʙatat*** *dulek.*
オインは　顔を　洗っている
Оин лицо моёт.

Oin ***ʙatat*** *aqtə dulek.*
オインは　顔を　上手に　洗っている
Оин лицо хорошо моёт.

Kola ***ʙatat*** *dulek.*
コーリャは　顔を　洗っている
Коля лицо моёт

Kola ***в****atat* *selə* *dulek.*
コーリャは 顔を 下手に 洗っている
Коля лицо плохо моёт.

Oin *ōŋdu.*
オインは 健康である
Оин здоров.

Koladə *destьŋ* *adat.*
コーリャの 目は 病んでいる
Коли глаза болят.

Batat *aqtə* *ulelek!*
顔を 上手に 洗いなさい
Лицо хорошо мой!

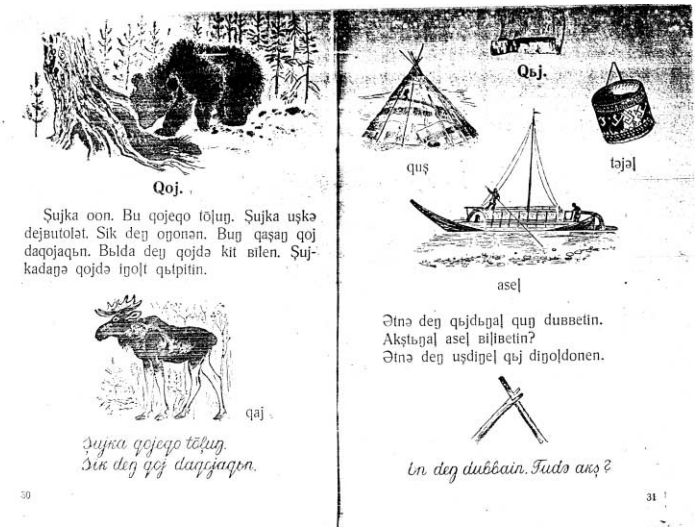
ətn **мы** 私たちは *əDn* KETICA. S.15, wir. *ad* 私は KETICA. S.15,ich. *didəŋuol****в****itin* **написали** 書いた *dideŋ-* KETICA. S.32, schreiben. *laŋən*（？）← *laʾm* [laʔm] KETICA. S.72, Tisch 食卓。 *ileŋ* **руки** 両手を *yl* KETICA. S.53, Arm. *kupkə* **перед** ～の前に KETICA. S.62, vor. *tudə* **этот** この KETICA. S.93, jener **этот**. *lam* **стол** 机 *laʾm* [laʔm] KETICA. S.72, Tisch. *ditlgə* **около** 近くに（？）← *dyl* KETICA. S.35, neben. *daŋqupten* **повисели** 掛けた *daŋguptə* KETICA. S.29, hängen.

ətn *skoladiŋə* *plakat* *didəŋuol****в****iti.*
私たちは 学校で ポスターを 書きました
Мы в школе плакат написали.

Ulelek *laŋən* *ileŋ* *kupkə!*
洗いなさい 食事 手を の前に
Мой руки едой перед!

Tudə *plakat* *skoladiŋtə* *lam* *ditlgə* *daŋqupten.*
この ポスターを 学校で 机の 近くに 掛けておいた
Этот плакат в школе стола около повисели.

p.30-31



qoj **медведь** 熊 KETICA. S.67, Bär. *qoieqo* ← *koioγə* KETICA. S.67, *qoi*. *ego* ← *ogə* **берлога** 巣穴 *ōgə* KETICA. S.75, Höhle; Nest. 同項 *koiō* Bärenloch 熊穴。 ***в****u* KETICA. S.26, *bu* er, sie 彼は、彼女は; Plur. *buŋ* . *tōluŋ* **увидел** KETICA. S.93, ich sah 私は見つけた; KETICA. S.30, *datuŋ* ich sehe 私は見つける。 *uskə* **домой** *uosk* KETICA. S.97, *uosk* nach Hause 家に。 *dei****в****utolət* ← *dejbugāwi*（？）KETICA. S.30, hinken 足をひきずる。*sik* **четыре** KETICA. S.81, vier 四。 *deŋ* **люди** 人々。 *oŋonən* **пошли** *ogon* KETICA. S.76, *ogon*? er ging 彼は行く。 *qasaŋ* **там** そこへ KETICA.には発見できず。 *daqojaq****ь****n* [daqojaqin] **убили** 殺した KETICA.には発見できず。 ***вы****da* [bilda] **все** 全ての KETICA.には発見できず。 *kit* KETICA. S.72, *kit* Fleisch 肉。 ***в****ilen* **ели** 食った KETICA.には発見できず。 *iŋolt* **шкура** KETICA. S.51, Fell 毛皮。 *qjtpitin* **дали** KETICA. S.65, *qəsəbət* geben 与える。同頁 *qətpət* er gab. *qaj* **лось** KETICA. S.63, Elentier 大鹿。 同頁 *qaje* Elentier, Elch ヘラジカ。ケートの熊、ヘラジカ、鹿等の大型獣狩りは、ウシ **ус'** us'と呼ばれる槍を使って行われた[21]。

Sujka	*oon.*
シュイカが	歩いていた
Сюйка	***шёл***.

21 ***Алексеенко*** 前掲書。頁56。

Bu *qojeqo* *tōluŋ.*
彼は *熊穴を* *見つけた*
Он ***медвежью*** ***берлогу*** ***увидел***.

Sujka *uskə* *dei**в**utolət.*
シュイカは *家に* *走った*
Сойка ***домой*** ***побежал***.

Sik *deŋ* *oŋonən.*
四 *人が* *出掛けた*
Четыре ***человека*** ***пошли***.

Buŋ *qasaŋ* *qoj* *daqojaq**ы**n.*
彼らは *そこで* *熊を* *仕留めた*
Они ***там*** ***медведя*** ***убили***.

*B**ы**lda* *deŋ* *qojdə* *kin* ***в**ēlen.*
全ての *人々は* *熊の* *肉を* *食べた*
Все ***люди*** ***медведя*** ***мясо*** ***ели***.

Sujkadaŋə *qoidə* *iŋolt* *q**ы**tpitin.*
シュイカに *熊の* *皮を* *与えた*
Сойке ***медведя*** ***шкуру*** ***дали***.

Sujka *qojeqo* *tōluŋ.*
シュイカは *熊穴を* *見つけた*
Сойка ***мевдедя*** ***берлогу*** ***увидел***.

Sik *deŋ* *qoj* *daqojaq**ы**n.*
四 *人々が* *熊を* *仕留めた*
Четыре ***человека*** ***медведя*** ***убили***.

*q**ы**j* [qij] **берёста** 白樺の表皮 KETICA. S.65, *qəʼj* [qəʔj] Birkenrinde. *qus* **чум** 幕舎 KETICA. S.61, Jurte, Zelt. *təjəl* **каробка** 容器 KETICA. *tojes* Gefäss aus Birkenrinde 白樺皮の桶。 *asel* **илимка** 楡の舟 KETICA. S.18, *asəl* grosses gedecktes Boot 天蓋のついた大きな舟; S.19, *aslin* (grosseres) Boot. *dubbət* **делать** 製作する KETICA.S.38, *dubbət* er macht, verfertigt. *ətnə* 何から、何で ← *aks* KETICA. S.16, was?（疑問詞）何。 ***в**ili**в**etin* KETICA. S.22, *bilebət* machen, tun, verfertigen こしらえる、する、製作する。 *usdiŋel* **из берёзы** 白樺から ← *us* **берёза** KETICA, S.97, Birke. ***ы**n* [in] KETICA. S.53, *yn, in, ine, üne* zwei. *du**вв**ain*（**тянутся** のロシア語訳から）引っ張り合う（?）KETICA.には発見できず。 *tudə* **тот** あの、その、彼方の KETICA. S. 93, *tud* (*ə*) jener.

ətnə　deŋ　qЬjdЬŋal　quŋ　duƀƀetin.
私たちの　人々は　白樺皮から　天幕を　つくる
Наши　люди　из　берёсты　чумы　делают.

AkstЬŋal　asel　ƀiliƀetin?
なにから　舟を　つくったか
Из　чего　илимку　сделали?

ətnə　deŋ　usdiŋel　qЬj　diŋoldonen.
わたしたちの　人々は　白樺から　表皮を　剥ぎ採る
Наши　люди　из　берёзы　берёсту　сдирают.

Ьn　deŋ　duƀƀain.
二　人々が　引っ張り合う（？）
Два　человека　тянутся.

Tudə　aks?
これは　なに
Это　что?

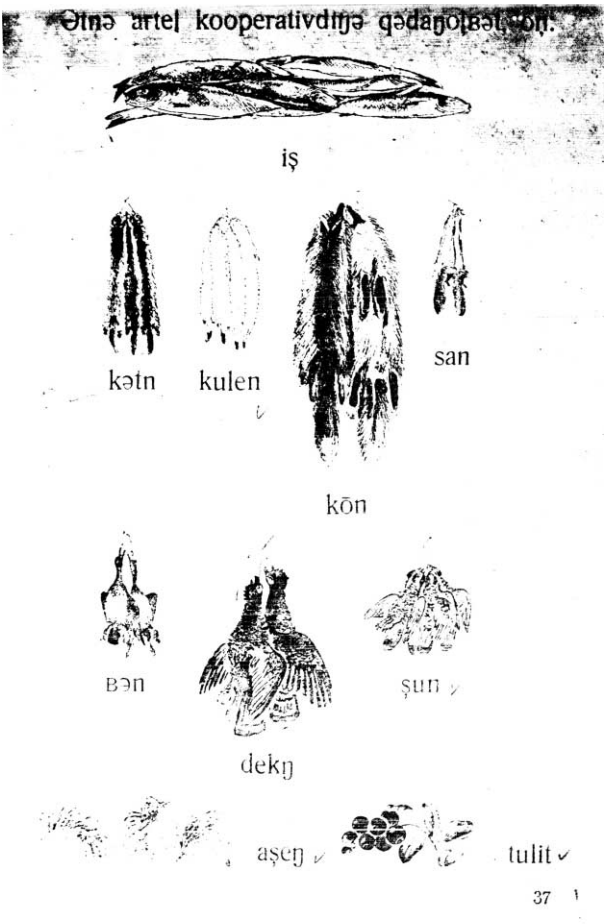
« Ьn deŋ duƀƀain » の文を、頁31の家舟の絵にある、棹をあやつり、舵を操作する二人の動作を表現したものと考え、「二人が引っ張り合う」と訳した。しかし、この訳は舟上の二人のこれらの動作とは整合しない。一人は棹を押し、もう一人は舵をとっているのであって、両者は引き合っていないからである。筆者（伊藤）は、« Ьn deŋ duƀƀain »「二人が引っ張り合う」の文を独立のものとみなし、問題の交叉する二本の棒の絵は、«Tudə aks?» 「これはなに」の文と関連すると考える。この絵は天幕の支柱の一部を描いたものなのである。ケートの白樺樹皮天幕は、このような二本組の支柱の交叉部にもう一本柱を組み合わせ、合計三本で主柱とするからである。この三本の主柱の上部三分の一のところに環状の枝を廻し、そこに更に二本の柱を加えて、幕舎の骨格とするのである。しかし、その場合でも、経験的に合理的な三本の支柱ではなく、不安定な二本で示した意図が不明であり、更に、「二人が引っ張り合う」の文が読者に与える一種の唐突さは、どうにも説明のしようがないままである。

別の筆者（下村）は « Ьn deŋ duƀƀain » の文を、読本の編集時に存在していた別の挿絵に対するものであって、その絵では、陸上の人が舟上の人と棹を引き合っていたのではないかと考える。一方、もたれあう二本の木の棒の絵は、家舟の絵の上の二人の人物とは関係をもたず、この頁の最後の文 « Tudə aks? » 「これはなに」と関係するものであり、漁労者が水路に仕掛けた網の方向と種類を備忘的に記録するため、地上に置いた装置であると考える。

p. 32

左は、鈍刃の刃物を使い、鹿皮の裏側の肉片と脂肪をこそぎ落とす場面である。スカーフの人物は男性である。右は女性が白樺の樹皮を草糸と針で縫い合わせている場面である。ケートの生活に白樺は欠かすことができない。白樺はカバノキ科の落葉高木であり、その樹皮は蝋質の白粉を帯びており、紙状に剥ぎとることが容易である。ケートはこの樹皮を様々な用途に用いる。例えば、秋冬の夜間の銛漁では燃やして松明とする。その他、食料保存の梱包材、家屋や舟の材料、籠や容器の材料に利用される。

p.37



artel **артель**（社会主義建設のための）生産協同組合は **кооператив**（社会主義建設のための）流通共同組合とともに、初期ソヴィエト連邦の経済計画担当者が、その整備に最も力を注いだ組織であった。ケートはこの組織を通してのみ漁獲物と肉角毛皮を売ることを強制された。 *qədaŋolвət* KETICA. S.65, *qəsəbət* geben 与える *qətpət* er gabt. *on* KETICA. S.77, viel, veile 多くの、多くのもの。 *jis* KETICA. S.55, Fisch 魚。 *kətn* KETICA.S.58, *kət* Marder テン。微かに見えるが、読本には書き込みがあり、それによれば ɔ が t と n に介入するとしている: kətɔn. *kulen* KETICA.には発見できず。 *kon* KETICA.には発見できず。 *san* KETICA. S.80, die Eichhörner リス; *sa˞s* [saʔs]. *dekŋ* KETICA.には発見できず。 *sun* KETICA.には発見できず。 *aseŋ* KETICA. S.18, *as* Feder, Daune 羽根,羽毛。 *tulit* KETICA. S.94, *tulyt tulit* Beere 漿果。

*ətna artel kooperativdiŋə qədəŋol**B**ət, on:*

私たちの 生産協同組合は 流通協同組合に 出荷した、(その)多くのものは：

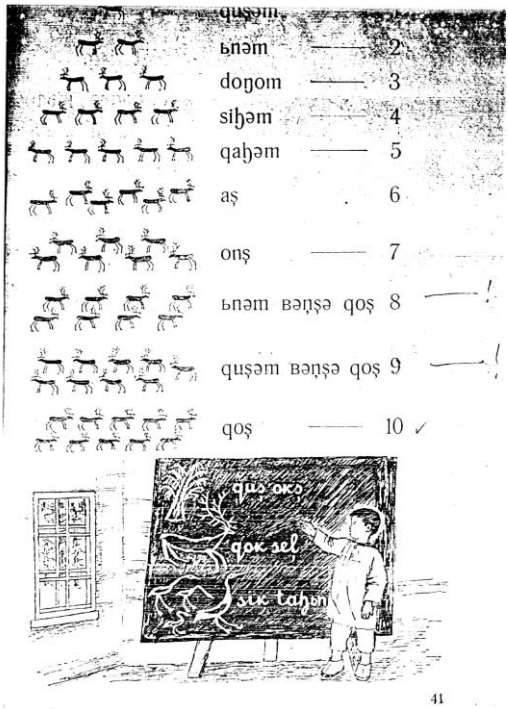
***Наша артель в кооператив сдала много**:*

*is, kətn, kulen, kon, san, **B**ən, dekŋ, sun, aseŋ, tulit.*

魚、シベリア鼬、おこじょ、狐、栗鼠、鴨、黄嘴大雷鳥、エゾライチョウ、羽毛、漿果である.

***рыбы**, **колонков**, **горностаев**, **лисиц**, **белок**, **уток**, **глухарей**, **рябчиков**, **пера**, **ягоды**.*

p.40



qusəm KETICA. S.70, eins 一。 ***Ь**nəm* [inəm] KETICA. S.53, *yn* zwei 二。 *doŋom* KETICA. S.37, *doŋəm* drei 三。 *siɦəm* KETICA. S.81, *sigəm siγəm sik* vier 四。 *qaɦəm* KETICA. S.63, *qagəm* fünf 五。 *as* KETICA. S.18, sechs 六。 *ons* KETICA. S.77, *onč ontš* sieben 七。 ***Ь**nəm* [inəm] ***B**ənsə* qos 八。 *qusəm* ***B**ənsə* qos 九。 qos 十。 ***B**ənsə* ← KETICA. S.22, *bənčəŋ bəntšəŋ*: 1. negatives Verb 否定動詞; 2. weniger 引くことの。 bən

を参照せよとあり、同語はKETICA. S.22, nein, nicht; un-.とある。八は *ьnəm* 二を引いた*qos* 十であり、九は *qusəm* 一を引いた *qos* 十の意味である。

p.48

Senьŋ.

Kinəqoŋə Kiŋko skoladiŋə bəŋ dinbəş. Biş ətn budə quşıьŋə dəŋon. Kiŋko adoot. Budə op senьŋdaŋə oon. Senьŋ dinbəş, qutki aḫoḫən. Senьŋ qutki binuqot. Bu daashaŋş: „Seḷ anьin". Kiŋkodə op oon seḷ dejeşan.

Bu seḷ daqaj.

Kiŋko bəŋ doqtoqon.

48

senьŋ [seniŋ] KETICA. S.81, *seneŋ* Schaman シャーマン、呪術治療師。 KETICA. S.85, *śanəŋ* Schaman. *dinbəs* KETICA. S.34, ich(od. er)kam 来る。KETICA. S.35, *djeksebes* kommen, ankommen, gehen 来る、行く。*kineqonge* KETICA.に発見できず。*bis* KETICA. S.23, Abend, am Abend 夕方。*budə*（？）KETICA. S.26, sie 彼女を（？）。*qustiŋə* KETICA. S.61, *kuos* 天幕。 *deŋon* ← danngabak（？）KETICA. S.29, finden 見出す（？）。*adoot* KETICA. S.15, *adat* 病気である。*qutki* KETICA. S.71, *qutkij* zaubern schamanieren 魔術を行う、シャーマン行為をする。*ahohen* KETICA.に発見できず。 *binuqot* 終える KETICA.に発見できず。 *daashans* KETICA. S.30, *daskanč daskans daskantš* sprechen 話す。 *anin* KETICA. S.18, *anij* töte 殺せ。 *dejesan* KETICA. S.33, *digij* töten 殺す。 *daqai* KETICA. S.28, *dagi daγi* er tötete 彼は殺した。 *doqtoqon* KETICA.に発見できず。

シャーマンの治療者としての実態が描き出されており、大変興味深い。病気を起こしている悪霊への犠牲として父親が殺した鹿はシャーマンへの報酬ともなる。シャーマンは独特の被り物を冠り、ハス **xac** [χas]（KETICA. S.45, *haʾs* Zaubertrommel 呪術

太鼓）またはケシ **кеш** [keʃ]（KETICA.に見当たらず）という枠太鼓を、ハットブル **хатбул** と呼ばれる撥で叩いて鳴らす。筆者等（下村・伊藤）は、これは古くは *kat* + *bul* ‘皮を巻いた鹿の脛骨’ という形であったと考える ← KETICA. S.57, ka⁷t Pelz 毛皮; S.26, *bul* Fuss 足。撥は鹿脛骨であり、鹿の毛皮が巻かれている。

アイヌ民族の枠太鼓はカチョkacho [kaʧo] と呼ばれるが、これら[χas]、 [keʃ]、[kaʧo]の三様の発音は音声的に極めて近いものである。太鼓の構造にはシベリアの地域毎に類型があり、何処かに少数の枠太鼓文化のセンターがあったと考えられている。太鼓は鳴らす前に炉の火で炙られ、その膜の張力が高められる。裏側には複数のリボンが結わえられており、子供に病気を起こしている悪霊は太鼓の音色とシャーマンの歌に誘い出され、このリボンに絡めとらる。シャーマンは天幕の外に出て、悪霊を叩き落とす。ケートは撥が太鼓に語らせる、と考える。こうして彼の（彼女の）一治療行程―ロシア語でセアーンス **сеанс** ―が終わる[22]。

ケートのシャーマンには、その能力の限定された小シャーマンとそうではない大シャーマンの別があった[23]。前者は五家族に一家族の割合で存在し、主として物語を語り、予言を行う。後者はケート社会にわずか十数人しかおらず、シャーマン本来の超自然的力を最大限発揮する人物として、尊敬の対象となっていた。男はセニンsenin と、女はセニムsenimと呼ばれた。シャーマンは神・精霊・人間という関係に於いては、中立的立場をもっていると考えられていた。なお熊崇拝もシャーマニズムでは重要な位置を占めている。

読本48頁の一連の例文は、子供が病気になり、父親がシャーマンの言うなりに鹿を屠るが、病気は治らなかったという意味のものである。ソヴィエト当局はこの原始宗教と呪術医療行為を駆逐しようと徹底的に弾圧した。

*Sen**ы**ŋə* シャーマン **Шаман**

*Kinəqoŋə　Kinko　skoladiŋə　**в**ən　dīn**в**əs.*

今日　キンコは　学校に　否定詞　来た

***Сегодня　Кинько　в школу　не　пришёл**.*

*Bis　ətn　**в**udə　qust**ы**ŋə　dəŋon.*

夕方　わたしたちは　彼を　幕舎で　見た

***Вечером　мы　его　в его чуме　нашли**.*

22　心理学者の故和田完小樽商科大学教授はシャーマニズムの研究者でもあったが、シャーマン治療には極めて高い治療効果があったと、意外な意見を下村に語ったことがある。

23　エドワード・エヴァンス＝プリチャード総監修、梅棹忠夫日本版総監修『世界の民族14シベリア』125頁。平凡社 1979。

Kinko　　adoot.
キンコは　　病気である
Кинько　　больной.
Budə　　op　　senɨŋdaŋə　　oon.
彼の　お父さんは　シャーマンのところへ　行った
Его　　отец　　к шаману　　пошёл
Senɨŋ　　dīnʙəs,　　qutki　　aɦoɦən.
シャーマンが　来て、　　呪術行為を　　はじめた
Шаман　　пришёл,　　шаманить　　начал.
Senɨŋ　　qutki　　ʙinuqot.
シャーマンは　呪術行為を　　終えた
Шаман　　шаманить　　кончил
Bu　　daashans:　　«Sel anɨin».
彼は　言った「トナカイを　殺せ」と.
Он　сказал:　«Оленя　убейте».
Kinkod　　op　　oon　　sel　　dejesan.
キンコの　お父さんは　出掛けた　トナカイを　殺しに
Кинько　　отец　　пошёл　　оленя　　убить.
Bu　　sel　　daqaj.
彼は　トナカイを　殺した
Он　　оленя　　убил.
Kinko　　ʙən　　doqtoqon.
キンコは　否定詞　　よくなった
Кинько　　не　　лучше　　стало.

１－５　読本と例文の特徴

ケート語の初等読本として書かれたものではあるが、その中身は優れた民族の記録となっている。エニセイ河北部の厳しい自然環境の中での彼らの日常生活が鮮やかに描き出されているのである。項目としてケート民族に特徴的なもの、シベリア諸民族にとって特徴的なもの、ケートの精神世界にとって重要なものが選ばれており、ケートの民族学的研究の資料ともなりうるものである。因みに、1926年でのケートの識字率は、男性で2%、女性で0.3%の低さであった。しかし、この読本の出版された二年後の1936年には、男女共に13.4%と著しく向上している。

読本の構成は、全体を概観すると、大きく分けて三段階に分かれる。読本の導入部

分である４頁から９頁にかけては、挿絵とその挿絵の内容を示す単語が、一対となって掲載されている。中盤部分の10頁から19頁では、導入部に引き続き、一単語に対して一個の挿絵が示され、同時に既出の単語を用いて、短文が示されている。終盤部分の20頁以降は、挿絵を、長文を用いて詳細に解説している。また読本末尾には、読本全体の例文のロシア語による説明が付されている。以上のように、読本は頁を重ねるにつれて、単語数が増加し、文法的にも複雑な文章が登場するようになる。

次に読本の例文について述べてみよう。例文は、肯定、命令、否定が使われたものが登場する。その内容は、狩猟・漁撈、日常生活に関する事項、植物、衛生・医療に関する啓蒙的事項、動植物に関する事項、政治的メッセージに関する事項、宗教活動に関する事項が選ばれている。

読本の例文の音声表記に於いて特徴的なものとして、カールゲルは声門閉鎖音を一貫して表記しない方針を採用している事実を指摘しよう。ケート語では、声門閉鎖音は異音（allophone）である。ある方言にはあるが、他にはない。また同一の単語に対し、声門閉鎖音のあるものと無いものの両方の例が挙げられていることも多い。母国語話者にとっては、それを運用時の発音に入れる入れないかは、彼らの自由にまかされているのであるから、ケート語の音韻字母を創造するに際して、わざわざ字母を増やすことになる声門閉鎖音は自由変異（free variation）として無視することにしたのである。これはケート語学習者の負担を軽減することにも、印刷上の経済性にもつながるものであるから、合理的な決定であった。

一方、ドンネルやドゥリゾンの研究書中では、彼らは声門閉鎖音を忠実に表記している。ドゥリゾンに拠れば、ケート語声門閉鎖音は無声音であり、母音の前にも後にも現れるという[24]。また、単語中では声門閉鎖音をもつ音節は母音の後ろか子音の前に現れる。母音に後続する場合、右側にある声門閉鎖音は左側の母音に融合する。また、後続子音が無声音であるならば、その前にある声門閉鎖音は内破（implosive）となり、声門閉鎖解除の音色は聞こえない。一方、後続子音が有声音の時、声門閉鎖のもつ無声性が右方に影響を及ぼし、この有声子音は―ドゥリゾンの表現に拠るならば―「囁き音化」される。

ドゥリゾンの列挙したこの現象は音声学的には自然なものである。ʔVʔを母音Vとその声帯振動開始相と停止相に現れる声門閉鎖の連鎖とし、ドゥリゾンの説明を次のように簡略に表現してみよう：$(C_1)V_1ʔV_2ʔC_2(V)$という連続では、① ʔは ʔ [＋vocalic]となる；② C_2[－voiced]ならば、ʔは ʔ [－release]という不明瞭な音となるが、C_2の方は明瞭に聞こえる音となる；③ C_1[＋voiced]ならば、C_2はC_2[－voiced] となり、声門無

24　***Дульзон*** 前掲書。頁48。

声摩擦音に近い音となる。

本読本に登場する語彙のうち、ドンネルとドゥリゾンがともに声門閉鎖音の存在を認める単語はʔaʔ、toʔt、kaʔt、taʔp、təʔə、jiʔ、duʔp、diʔ、saʔk、seʔn、kəʔi、diʔn、kɨʔt、 laʔm、qəʔj、saʔs、haʔs であるが、このうちtoʔt、kaʔt、taʔp、duʔp、saʔk、seʔn、diʔn、kɨʔt、laʔm、saʔs、haʔs は CVʔ-{p, t, k, s} と CVʔ-{m, n, l} の二類に整理することが可能であろう。{p, t, k, s} は－voiceで、{m, n, l} は＋sonority でまとめた自然音類である[25]。ドゥリゾンは前者から生まれる ʔp、ʔt、ʔk、ʔs を{声門内破＋無声子音} 、後者から導きだされる ʔm、ʔn、ʔl を{無声声門破裂音＋無声 m n l}とし、両声門破裂音を無声としたのである。

ドゥリゾンは声門閉鎖音に無声と有声の別があるとの前提に立っているが、声門閉鎖音に二種類を認める考え方は、ケートの周辺の言語であるネネツ語（Nenets）に関しても提出されている。ケートより更に北方のロシア連邦極北地域に展開するネネツ族 （別名ユーラク・サモエード Yurak-Samoyed）の言語は非常に複雑な音韻組織をもつことで知られる。その声門閉鎖音には、語末で口腔に開放されて無声となるものと、鼻腔に開放されて有声となるものとがあり、両者は弁別的に振舞うと、自らがネネツ族出身の言語学者テレシチェンコ女史（**Н. М. Терещенко** N. M. Tereshchenko）は主張している[26]。ウラリストの間では、特に鼻腔開放声門閉鎖音の実在を軸にして、激しい論争が展開された。本読本の筆者のうち下村はネネツ語の音声資料を入手し、ディジタル・ソノグラフで分析を行ったが、単音節語で語末に声門閉鎖音が聴き取られる例は、 ことごとく口腔開放か鼻腔開放かを示すソノグラムを与えるものであった[27]。また、鼻腔開放に相当する反共振フォルマントが描かれる区間は約120msにもなり、その長さは異様に長い。120ms長とは、例えば、英単語 «cotton» のもついくつかの方言形のうち、[t]を[ʔ]で代用する形 [kaʔn] に見られる無音区間40msの三倍にも達するものである。それ以上に、この無音区間内部には発音の経済性に逆行する声門開口度の複雑な制御が見てとれるのである。この長さと内部構造の複雑さを説明するために、筆者（下村）は、声門閉鎖音に連結した無音区間が、実は、消滅した音節の痕跡ではないかとの考えを提起したことがある。

はたして、上に提示したケート語声門閉鎖単音節 CVʔ-{m, n, l} のソノグラムにも、ある程度長い無音区間が現れ、そこに構造化されたフォルマントが描き出されるのであろうか。ケート語の声門閉鎖音節の問題は、おそらくこの言語の系統にまで関わる

25　土橋善仁北見工業大学助教授からの御教示。

26　Janhunen J. *Glottal Stop in Nenets.*　Mémoires de la Société Finno-ougrienne. Vol. 196. Helsinki, 1986.

27　下村五三夫　「ディジタル・ソノグラフによるネネツ語声門化音の分析」　日本音声学会編『音声の研究』（第22集）　東京1988

ものに違いないが、この音節の内部構造の解析がその重要な手がかりを提供すると思われる。

第二章　ドンネル録音蝋管資料の分析

２－１　ドンネル録音資料

1883年創立の The Finno-Ugrian Society（フィン・ウゴール学会）の基礎を固めた言語学者であり、フィンランド議会上院議員でもあった Otto Donner の息子、カイ・ドンネル（Kai Donner 1.IX. 1888 – 12.II. 1935）は、同学会（フィンランド語では Suomalais Ugrilainen Seura）からの要請に基づき、1912－13年と1914年の二度ロシア・ウラル地方在住の非ロシア系諸民族の言語を調査したが、その時エヂソン蓄音機によって彼らの音声を30本の蝋管レコード－ロシア語では **валик** －に記録している[28]。ドンネルの専門言語はセリクープ Selkup（別称オスチャク・サモエード Ostyak-Samoyed ）であったが、本論文の初歩読本の言語の話者であるケート Ket の集落と、既に僅少の言語人口になりつつあったカマッシ・サモエード Kamas-Samoyed の集落で調査を行っている。その旅行範囲は広大なものであり、北は北緯70度エニセイ湾の村ドゥヂンスコエ **Дудинское**（現ドゥヂンカ **Дудинка**）から南は北緯58度サヤン山地の麓カマッシの村アバラコヴァ **Абалакова** に及んでいる。

5kgもあるエヂソン蓄音機と、一本が茶筒ほどもある録音管を数十本携えての、シベリアでの近代的音声調査の魁として、ドンネルの他にアヌーチン（**В. И. Анучин** V. I. Anuchin）と初等読本著者のカールゲルその人がいる。アヌーチンはケートのシャーマン歌を20本の蝋管に記録し、カールゲルは48本の蝋管に収めている[29]。

ドンネル資料の録音管一本あたりの記録時間は最長2分半、中には2分に満たないサンプルもある。収録された資料は、言語名を記載していないもの数例、オスチャク・サモエード語、今日では死語となって久しいカマッシ語 Kamassian、タタール語 Tataric、トルコ語 Turkic、ロシア語である。我々がドンネルのこの音声資料に注目する理由は、九十年前の少数民族の生の声の記録という歴史的稀少性のほか、既に上で指摘したように、目録８番の資料はケート語のものである可能性があるからである。更には、1912～1914年という短い期間での少数民族の共時的口語資料が、同一の記録装置で同一録音時間という一定の条件のもとにある点もまた重要である。全資料の長時間スペクトルを並べ比較するならば、それは記録された諸言語の共時相の一局面

28　蝋管とは呼ばれるものの、その素材は植物性蝋ではなく、ラックlac（カイガラムシ）と呼ばれる昆虫の雌が木の枝に分泌する樹脂様物質である。

29　***Дульзон А. П.*** **Кетский язык. С.** 10, 13. **Томск** 1968.

を見ることと同じになるからである。

ドンネルはわずか四十五歳の若さで結核のため亡くなったが、第二次世界大戦後ヘルシンキ大学教授アウリス・ヨキ（Aulis J. Joki）によって、これら30本の蝋管の目録が作製されている。筆者のうち下村がヘルシンキのフィン・ウゴール学会で同目録を収集した。目録の題名と資料番号28、29、30はフィンランド語で、それ以外はドイツ語で記載されている。なお目録の番号は記録日時の順序とは必ずしも一致していない。

筆者等の目を特に惹いたのは、吹込み者 Aleksej Arbaldaev による目録番号5、6、9である。番号5の資料ではケート語で‘精霊’を意味する kunč [kunʧ] ― KETICA. s.59では *kynč* [kɨnʧ] ― がしばしば歌われているからである。なお目録番号7と8の吹き込み者はFedosej Karpovič である。これら5本の蝋管録音は1912年11月6日オビ河の支流の一つケート川の集落に於いて、ただ一日で収録されたものである。他の蝋管の蓋に書き込まれている”ostjaksamojed”（オスチャク・サモエード）という呼称は、Selkup (**сулькупы**) ―‘タイガに住む人’ の意味―に対して使われていた旧称である。また **остяки** (the Ostyaks)という名称自体はロシア人が二十世紀初頭まで Khanty (**Ханты**) ハントを指すのに用いた名称であるが、当時はケートまでをも含むものであった。（語源は«**Ас - ях**»（アス・ヤフ As-yah）'**народ большой реки**' ‘大河の人々’が考えられるという）[30]。

ドンネルはケート語の語彙と音声収集を1912年11月中に終えており、その上、音声資料はこの30本の蝋管資料しか存在していないのである。 少なくとも、kunčを含む資料5 とそれを吹き込んだ Aleksej Arbaldaev による資料6 と9は、ケート語のものである可能性のあることを指摘しておこう。

論文で使用した初等読本と音声資料は、それぞれ下村が原典からゼロックスコピーとカセットテープへ複写したものである。

Kai Donnerin fonogrammikokoelman luettelo　「Kai Donnerの録音管目録」

第一回目の旅

1912年6月収録資料

1. Anfang eines Schamanengesangs. Tym-Fluss, Jurte Kočjader. Semjon Karlgin. Tymsk 10.6.1912
   「シャーマン歌のはじめ部分」（於）トィミ川コチヤーデルの幕舎
   （吹き込み）セミョン・カールギン　トィミスク　1912年6月10日

30　前掲書 **Энциклопедия**:**Народы России**. C. 313.

注意：Tym 川とはシベリアの大河 Ob 河の一支流であり、下流に向かって右岸にある。

2. Tym-Fluss, Kočjader. Semjon Jeliseič. Tymsk 24.6.1912
（於）トィミ川コチヤーデルの幕舎　（吹き込み）セミョン・エリセイチ
トィミスク　1912年6月24日

3. Vasjuganer Lied (ostjaksamojedisch). Ivan Teikin. Tymsk 20.6.1912
「（オスチャクサモエード）ワシユーガン川の歌」（吹き込み）イワン・テイキン
トィミスク　1912年6月20日
注意：Vasjuganもオビ河の一支流の名(Vas'-Yugan)であり、Tym 川とは向かい側になる。

4. Ostjaksamoj. Lied. Tymsk im Juni 1912. (Undetutlich)
「オスチャクサモエードの歌」　（吹き込み者、日時不明）
トィミスク　1912年6月

(27) „Kleiner Vogel“, ostjaksamoj. Lied. Oläška Oldžigin. Tymsk 25.7.1912
「オスチャクサモエードの歌“小さな鳥”」（吹き込み）オリャシュカ・オリジギン
トィミスク　1912年7月25日
注意：この歌は番号27であるが、1912年7月収録とあるので、ここに入れた。

1912年11月収録資料

5. „Altes Lied” vom Ket-Fluss. Aleksej Arbaldaev. Makovskoe 6.11.1912.
「ケート河の古き歌」　（吹き込み）アレクセイ・アルバルダーエフ
マコフスコエ大村　1912年11月6日
注意：この歌の後半（1:42-2:00）の部分にはケート語語彙 kunč [kunʧ] ‘精霊’が、繰り返されている。しかし吹き込み者Aleksej Arbaldaevの民族名は記載されていない。ケート河はエニセイ河の支流ではなく、オビ河の支流である。エニセイ河上流の大村マコフスコエはケート他の住民を管轄する。

6. „Altes Lied II“ vom Ket-Fluss, Jurte Metaškina. Aleksej Arabaldaev. Makovskoe 6.11.1912.
「ケート河の古き歌(二)」（於）メタシュキナの幕舎
（吹き込み）アレクセイ・アルバルダーエフ
マコフスコエ大村　1912年11月6日

7. „Zauberlied I“ vom oberen Ket, Jurte Nalimka. Fedosej Karpovič.
「上ケート河の魔の歌」（於）ナリムカの天幕
（吹き込み）フェドセイ・カールポヴィッチ（吹込者と日にちの記載無し）

8. „Zauberlied II“ vom oberen Ket, Jurte Nalimka. Fedosej Karpovič. (Gut)
「上ケート河の魔の歌（二）」（於）ナリムカの天幕
（吹き込み）フェドセイ・カールポヴィッチ（良好な録音）

9. „Zauberlied“ vom mittleren Ket, Jurte Metaśkina. Aleksej Arabaldaev. Makovskoe 6.11.1912.
「中ケート河の魔の歌」（於）メタシュキナの天幕
（吹き込み）アレクセイ・アルバルダーエフ　マコフスコエ大村　1912年11月6日

1913年1月収録

10. Ostjaksamojedisches Lied aus Turuchansk, gesungen von Pavel. 21.1.1913
「パーヴェルが歌ったトゥルハンスクのオスチャク・サモエードの歌」
1913年1月21日
注意：Turuchansk はエニセイ河のほぼ下流に位置する大村である。ケートの居住圏であり、ドンネルは既に前年の11月23日から25日にかけて、ここを通過している。資料注釈にはOstjaksamojedischesとあるので今日のSelkup（**сулькупы**）セリクープかと思われる。

11. Schamanenlied. Tas-Fluss (bei der Kirche). Pan Andreev. 18.1.1913. (Ziemlich gut)
「シャーマンの歌」（収録地）タズ川の教会の傍
（吹き込み）パン・アンドレーエフ　1913年1月18日　（おおむね良好な録音）
注意：ドイツ語でTas はロシア語で **Таз**“タズ”と呼ばれる川のことであり、これはオビ河とエニセイ河の中間を流れる独立した河川でオビ湾に注ぐ。東のエニセイ河の村トゥルハンスクとは連水陸路で繋がっている。

12. Lied vom Tas-Fluss (bei der Kirche). Pan Andreev.
Turuchan-samojedische　Melodie. (Mittelmässig) 18.1.1913.
「タズ川の歌」（於）教会の傍　（吹き込み）パン・アンドレーエフ
トゥルハンスク・サモエードの旋律　（中程度良好）1913年1月18日

13. Lied vom Tas-Fluss. Pan Andreev. Melodie vom Vach-Fluss. 18.1.1913. (Schlecht)
「タズ川の歌」　（吹き込み）パン・アンドレーエフ
ヴァフ川の旋律　1913年1月18日（録音状態不良）
注意：ヴァフ川はオビ河の支流である。

14. Schamanenlied vom Tas-Fluss. Pan Andreev. Lied des Schamanen Andrej.
Die gewönliche Melodie der Schamanenlieder. Bei der Kirche von Tas 19.1.1913. (Schlecht)
「タズ川のシャーマン歌」　（吹き込み）パン・アンドレーエフ
シャーマンであるアンドレーエフの歌。シャーマン歌のありふれた旋律。
（於）タズ川の教会の傍　1913年1月19日（録音状態不良）

15. Lied vom Tas-Fluss. Pan Andreev. 20.1.1913.
「タズ川の歌」　（吹き込み）パン・アンドレーエフ　1913年1月20日
16. Vom Tas-Fluss. 21.1.1913
「タズ川の（歌）」　1913年1月21日
17. Schamanenlied vom Tas-Fluss (der Kirchendieners Ivan). Pan Andreev. 23.1.1913
「タズ川のシャーマン歌」（於）教会の下僕イワン宅
（吹き込み）パン・アンドレーエフ　1913年1月23日
注意：筆者にはIvanとAndreev、もしくはIvanとシャーマンの関係が不明である。ここでは「教会の下僕イワン宅」と解釈した。
18. Lie vom Tym-Fluss.
「トィム川の歌」
注意：トィム川はオビ河の支流であるが、ヴァフ川の上流に位置する。

第二回目の旅

1914年8月収録

19. Kamassiches Lied. Šamanka. Abalakova 7.8.1914
「カマッシの歌」（吹き込み）女のシャーマン　1914年8月7日
注意：Abalakovaアバラーコヴァはサヤン山地にあるカマッシ族の村名である。
20. Kamassiches Lied. Abalakova 7.8.1914
「カマッシの歌」（収録地）アバラーコヴァ　1914年8月7日
21. Tatarisches Lied. Abalakova 6.8.1914
「タタールの歌」（収録地）アバラーコヴァ　1914年8月6日
22. Tatarisches Lied. Šamanka. Abalakova 7.8.1914 (Sehr gut)
「タタールの歌」（収録地）アバラーコヴァ　1914年8月7日（おおむね良好な録音）
23. Lied?
「歌？」
24. Russisches Lied («**Ах ты ноченка**»). S. Zavodovolij. Tymsk 15.7.1912
「ロシアの歌」（「夜よ」）Ｓ.ザヴォドヴォーリイ　トィミスク　1912年7月15日
25. Allgemeine russisches Romanze.
「ふつうのロシア叙情歌」
注意：これは **Красный сарафан**「赤いサラファン」という歌である。
26. Türkisches Lied aus Konstantinopel. Gesungen von einem alten Griechen in Abalakova.
「コンスタンチノープル起源のトルコの歌」
アバラーコヴァ在住老ギリシア人による

(27) „Kleiner Vogel“, ostjaksamoj. Lied. Oläška Oldžigin. Tymsk 25.7.1912
「オスチャクサモエードの歌 “ 小さな鳥 ”」（吹き込み）オリャスカ・オリジギン
トィミスク　1912年7月25日
注意：この資料は上に移動した

1914年8月収録

資料番号27の後 Proosaa（散文）として、フィンランド語で次のような項目が続く：

28. Kamassilainen satu (gud'ur). Šamanka. Abalakova 12.8.1914
「カマッシ人のおとぎ話」（語り手）女のシャーマン
（収録地）アバラーコヴァ　1914年8月12日

29. Sadun loppu. Šamanka. Abalakova 6.8.1914
「おとぎ話のおしまい」（語り手）女のシャーマン
（収録地）アバラーコヴァ　1914年8月6日

30. Kertomus metsästä. Abalakova 6.8.1914
「森からの物語」　（収録地）アバラコヴァ　1914年8月6日
このうち最後の二つは音声記録が散逸している。筆者たちが分析したのは28までである。

２－２　長時間平均スペクトルの比較

およそ90年前に収録された音声記録であるが、各サンプルをその最初から最後まで、長時間平均スペクトルの視点から観察することとする。ある音声のもつ音韻情報と韻律情報の全てはソノグラムに含まれているが、これは各分析時刻の断面スペクトルを時間軸に沿って並べたものである。断面スペクトルの一つ一つは観測時点での倍音構成を示すが、これは大まかに言って、喉頭音源情報が際立って現れる約300Hz以下の低域、口腔のフィルター特性が具現する約300Hz以上4kHzまでの中域、個人の口腔の細部の特徴がよく反映するとされる約4kHz以上8kHzまでの高域、の三つに分けることができる。低域が韻律などの超分節素を載せており、中高域が子音母音などの分節素を載せていると表現してもよいであろう。断面スペクトルを測定時間長で平均したものが長時間平均スペクトルであるが、筆者等は、これには音声の聴取実験の後に被験者が頭脳の中に形成する、漠然とした “ 音の像 ” を決めるものが含まれているのではないかと考える。例えば、オスチャク・サモエード語とされる音声を聞いた後にカマッシの音声を聞くと、イントネーション等の韻律の違い以外に、我々に両者が明らかに異なる言語であると感じさせるものがある。筆者等はそれが、分節素に相当するところの周波数・エネルギーの周波数軸上での分布の規則性であり、その測定期間内での繰り返しの規則性に対応するものではないかと考えるのである。また同一人

物の音声であることも聞き取りで判定できるが、この手がかりも平均スペクトルのある部分に含まれていると考える。これから資料の長時間平均スペクトルを提示するが、周波数軸・エネルギー軸の座標読み取りスケールとして図1を挙げる。

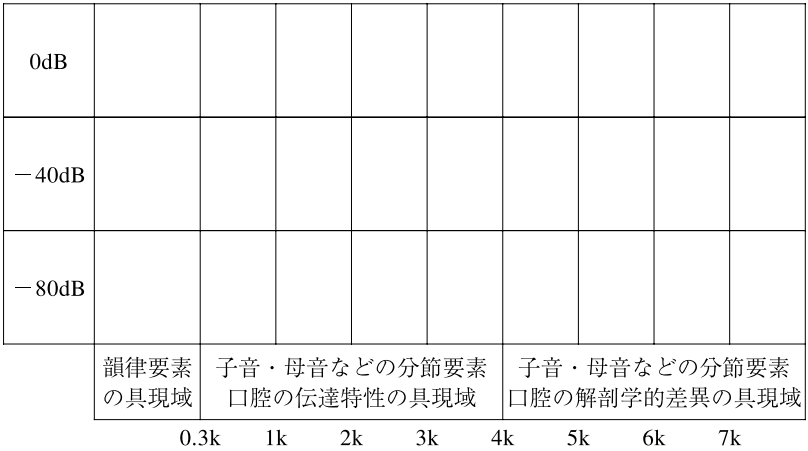
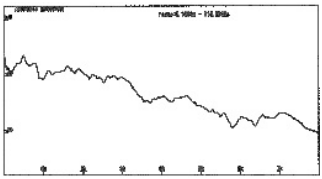


図1. 断面スペクトル上での音韻情報具現域と周波数軸・エネルギー軸の座標読み取りスケール

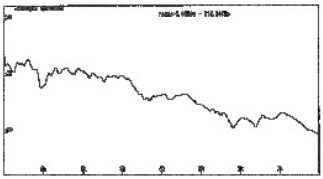
音声資料はどれも蝋管レコード特有のシャーという雑音が被さっており、その結果音声成分がその中に埋没している。しかしフィルターを通して雑音を除去した場合の音声は、期待に反し音韻の同定がむしろより難しいものに変わってしまう。筆者等は、分析ではフィルターを使わずに、原記録をそのまま使用した。以下に、ドンネル目録の順に、録音サンプルに対する長時間スペクトル分析の結果を示す。

民族不明



1. Anfang eines Schamanengesangs.
Semjon Kargin

民族不明

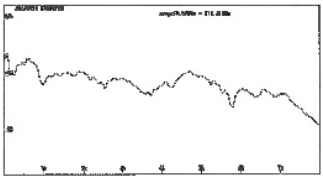


2. Tym-Fluss, Kočijader.
Semjon Jeliseič

資料1は男声の単調な歌、資料2も男声の旋律に乏しい歌である。両者は歌の内容が異なるが、包絡線の形は1.8kHz以下の低域で異なるだけで、それより高域ではよく一致する。200Hz以下が急峻な谷によって分離されているが、これは F0（ゼロ・フォルマント）に相当するものであろう。また3.6kHz付近で急な傾斜が形成されている。ここは母音 [i] の F2（第2フォルマント）が生ずる領域であり、母音帯域の上限である。 5.6kHzと6.4kHzにも谷が形成されている。

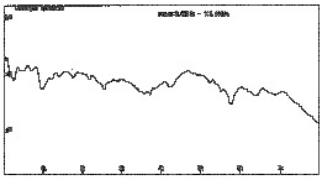
吹き込み者はどちらもSemjonという名であるが、同一人物である証拠がない。1.8kHz以上の包絡線の完全な一致が同一人物であることを示すのであろうか。しかし、吹き込み者が同一人物のものでも、1.8kHz以上の帯域でスペクトルの異なる場合が多々ある。例えば、資料5、6、9は Aleksej Arbaldaev、資料11、12、13は Pan Andreev によるものであるが、この帯域の各包絡線は相互に微妙に異なる。

オスチャク・サモエード



３. Vasjuganer Lied (ostjaksamojedisch).
Ivan Teikin

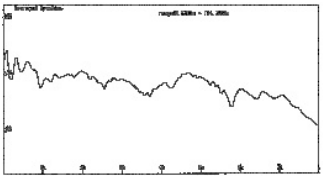
オスチャク・サモエード



４. Ostjaksamoj. Lied.
吹き込み者不明

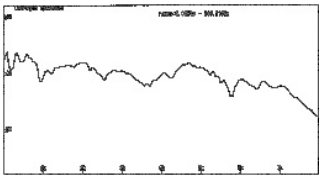
資料3と4は別々の男声の例。1kHz以上で包絡線は一致する。両者で200Hz以下が急峻な谷によって分離されている。ともに、1kHz、2.6kHz、3.6kHz、5.8kHz、6.4kHzで谷が形成されている。4.8kHzにある峰の高さは1.5kHzにあるその高さにほぼ等しいが、これは稀な現象である。

民族不明（ケートの可能性あり）



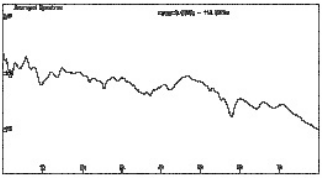
５. „Altes Lied“
Aleskej Arbaldaev

民族不明（ケートの可能性あり）



６. „Altes Lied II“
Aleskej Arbaldaev

民族不明（ケートの可能性あり）



９. „Zauberlied“
Aleskej Arbaldaev

これらの吹き込み者は同一人物であるが、1.8kHzより高域を除けば、相互に異なる包絡線をもつ。 歌はともにシャーマン歌であるが、旋律の聴覚印象では資料5と6は互いに似ており、9はそれらとは似ていない。この印象に対応するものは、1kHz以下での資料5と6との包絡線の類似、資料9のこれらとの相違を指摘することができよう。また、三例ともに、1kH、2.6kHz、3.6kHz、5.8kHzに谷をもっている。

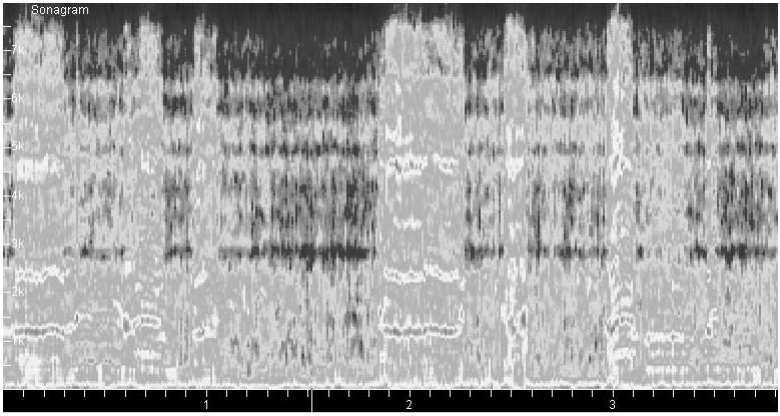
ここで、吹き込み者が同じであることが確認できるこれら三例を使い、吹き込み者が同一人物であるかどうかを確かめる試習的方法を提案したい。この目的での長時間スペクトルの観察に於いて、我われは、F0領域を右に越え、その右方にある峰と、200Hzの谷を右に越え、ここから400Hzまでの間にある峰々に注目する。資料5、6、9のスペクトル包絡線を重ね合わせ、灯火に透かして観察してみよう。同一ピーク周波数をもつ峰の左右の斜面の形状が、複数の比較点で一致することが判るであろう。

目録注釈の日付から分かるように、ドンネルはケート川での録音記録5、6、7、8、9を1912年11月6日一日で収録している。吹き込み者は二人で、アレクセイ・アルバルダーエフ Aleksej Arbaldaev とフェドセイ・カールポヴィッチ Fedosej Karpovič である。当時のオスチャクの呼称にはケートも含まれていたが、この二人がケートであった可能性については、上で既に指摘した。資料5、6、7、8、9の蝋管音声資料には、これがケート語であるとする注釈は付されていない。目録上ケートを暗示する言葉は“Ket”川だけである。フィン・ウゴル学会刊の言語地図『ウラル諸語の地理的分布』(1980) に拠れば、Ket 川にはセリクープが居住している[31]。前述 Tym 川もセリクープの居住地域、対岸の Vas-Yugan 川はハントの居住地域である。したがって、ドンネルはケート川ではセリクープの音声を収録したのではないのかという疑問が生ずる。しかし、ドゥリゾン は「ケート語」(1968)で、「1911年から1913年にかけての西シベ

31　*Geographical Distribution of the Uralic Languages* Finno-Ugrian Society. Helsinki University. Helsinki 1980.

リア調査で、ドンネルはエニセイ・ケート族の言語と民族誌に関する貴重な資料を収集した…」、と明言している[32]。その上、ドンネルがケートを調査したのはこの11月中であり、録音資料で11月収録のものは資料5、6、7、8、9のみである。また、Aleksej Arbaldaev 吹込みの音声資料5は、ケート族のシャーマニズム用語クンチ kunč～kinč ‘精霊’を含む。したがって、間接的証拠からではあるが、同吹き込み者による番号5、6、9の三本の蝋管録音資料はケート語のものである可能性がある。kunč～kinč ‘精霊’がセリクープとハントにあるのかどうか、両言語の専門家の意見を待ちたい。

さて、kunčという語は1分40秒～2分00秒のあたりで度々聞こえるが、偶然にも、同語の前には声門閉鎖音が見出される。それを含む区間のソノグラムを図1に示そう。



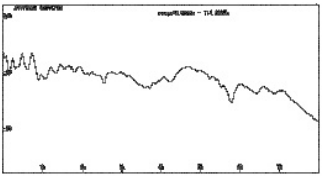
o ：o ʔ ɦ ʔ am taj　　to ： ot　to ʔ ʃ　　a k ku ： ku n ʃ

図1. kunč～kinč ‘精霊’と声門閉鎖音2箇所を含む音声連鎖のソノグラム。左側の声門閉鎖区間 ʔ ɦ ʔ は約120ms長、右側の声門閉鎖区間ʔ ʃは約100ms長である（ドンネル資料目録５番「ケート川起源の魔の歌」のはじめから1分40秒～2分00秒のあたりに録音されている）

左側の声門閉鎖区間[ʔ ɦ ʔ]は、あたかも、内部構造をもつかのように見える。調音運動の流れもまた、「経済性の原則」に逆行するような、より複雑なものとなっている。この声門閉鎖音に挟まれた異様に長い区間は、音節の痕跡を見せているのであろうか。

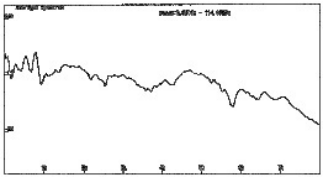
32 ***Дульзон, А. П.*** **Кетский язык**. С.9. **Издательство томского университета**. **Томск** 1968.

民族不明



***
7. „Zauberlied I”
Fedosej Karpovič

民族不明

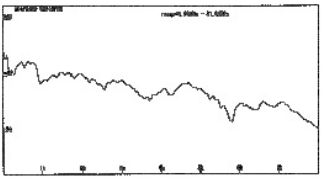


***
8. „Zauberlied II”
Fedosej Karpovič

資料7と8は男声による呪術の歌。200Hz以下が急な谷によって分離されており、ここから1kHzの帯域で鋭い峰が三つ現れている（250Hz-500Hz-750Hz ***で標示）。2.6kHz以上の包絡線はほぼ一致する。1kH-2.6kHz-3.6kHz-5.8kHzに谷をもっている。200Hz～1kHzの峰のプロフィールは他の例にない独特のものである。250Hz-500Hz-750Hzという周波数は、この順に母音 i－e－a のF1の領域相当する。

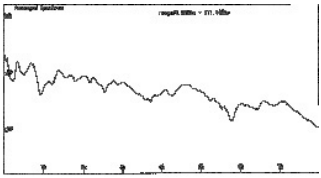
ここで、資料5、6、9に適用した話者同定の方法を、これら7と8に対して行ったみよう。結果は、200Hzの谷の左右で、複数の峰の斜面の形状は、複数の点で同時に重なり合うものとなうであろう。

オスチャク・サモエード



10. Ostjaksamojedisches Lied.
Pavel

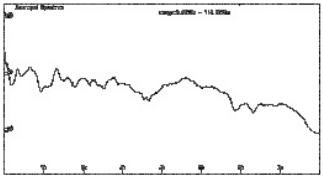
トゥルハンスク・サモエード



11. Schamanenlied.
Pan Andreev

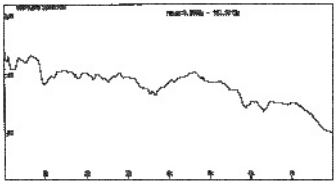
資料10は針飛びの雑音の多い例である。200Hz以下が急な谷によって分離されている。1kH-2.6kHz-3.6kHz-5.8kHzに谷をもっている。 資料10と11では、吹き込み者が異なるのだが、興味深いことに、包絡線は2.6kHz以上の帯域では完全に重なるのである。2.6kHz以上の帯域の平均スペクトルには、個人差は模様の中に埋没して現れないということなのだろう。

トゥルハンスク・サモエード



12. Lied vom Tas-Fluss.
Turuchan-samojedische Melodie.
Pan Andreev

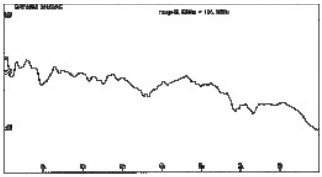
トゥルハンスク・サモエード



13. Lied vom Tas-Fluss.
Melodie vom Vach-Fluss.
Pan Andreev

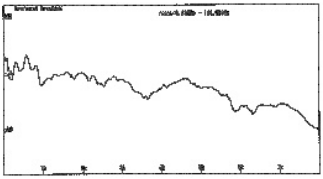
上で既に指摘したことと重なるが、資料11、12、13、14、15、17は Pan Andreev 一人の吹き込みであるが、各包絡線は中高域でどれも相互に異なる。また吹き込み者が異なる資料14と15とでは、1.5kHz以上での両者の包絡線は重なるのである。

民族不明



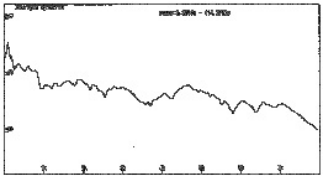
14. Schamanenlied vom Tas-Fluss.
Andrej

トゥルハンスク・サモエード



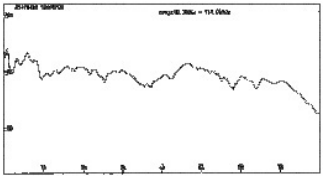
15. Lied vom Tas-Fluss.
Pan Andreev

民族不明



16. Vom Tas-Fluss.
吹き込み者不明

トゥルハンスク・サモエード



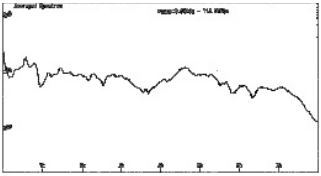
17. Schamanenlied vom Tas-Fluss.
Pan Andreev

資料16と17はともに男声の歌である。一見すると、両者は全く異なっているのだが、SN比が異なるだけである。資料16の包絡線を、1kHz以上の帯域でエネルギー軸

に沿い、上側に移動させると、両者の包絡線は完全に一致する。資料16の包絡線は17のそれより下側に推移しているのだが、通常この有様の方が雑音の少ない録音を示すのである。ただし、資料16の録音は資料17と同じくエヂソン録音機特有のシャーという雑音が被さっている。

ここでもまた、資料5、6、9および資料7と8に適用した話者同定の方法を、資料11、 12、13、14、15、17に対して行ってみるならば、200Hzの谷の左右で、峰々の包絡線の斜面は複数の点で同時に重なり合うのである。さらに、話者が別人であることが確認される資料5、6、9（吹き込み手は Fedosej Karpovič）と、資料7と8（吹き込み手は Aleksej Arbaldaev）とに対して試みるならば、この六例（吹き込み者Pan Andreev）は前二者とは重なり合わない。また、前二者同士も重なり合わないことが判明する。

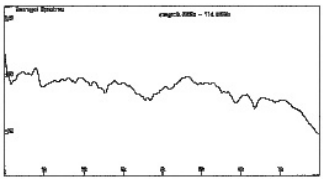
民族不明



18. Lied vom Tym-Fluss.
吹き込み者不明

資料18は「トィム川の歌」とあり、吹き込み者不明とあるので、資料12と比較すべきものであろう。しかし資料18はこの二例とは、谷の配列では似ているものの、全帯域での包絡線の形はやや異なる。

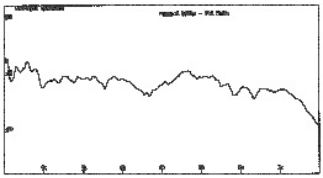
オスチャク・サモエード



27. „Kleiner Vogel”, ostjaksamoj. Lied.
Oläška Oldžigin

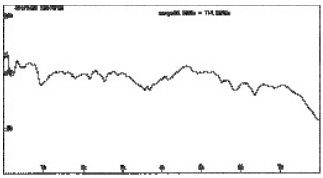
男声の歌。これまでのオスチャク・サモエード音声の分析例と比較すべきもの。200Hz以下が急な谷によって分離されている。3.6kHzを中心に谷が形成されており、これより高域の有様はそれらとよく一致する。

カマッシ



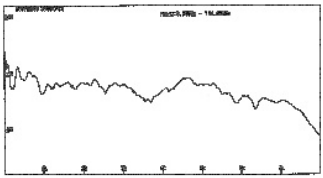
19. Kamassisches Lied.

カマッシ



20. Kamassisches Lied.

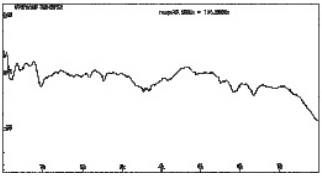
カマッシ



28. Kamassilainen satu (gudʼur).

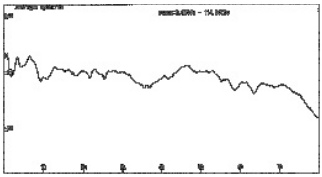
カマッシ語は今日では死語であり、これらは非常に貴重な記録である。資料19と20は女声のシャーマン歌であり、資料28はシャーマン女性の語りである。三例ともに、2.6kHz以上の帯域での包絡線のプロフィールはよく似ている。この帯域で、資料19と20はほぼ重なり、資料28は両者に対してエネルギーレベルの低い方向に位置している。資料19と20はシャーマン歌、資料28は語りであることを合わせ考えると、この現象は歌と語りのもつ音韻上の統計的差異に対応するものなのかも知れない。ただしここまでの例と比べたとき、カマッシの包絡線の形は全帯域に於いて平坦であると言えよう。

タタール



21. Tatarisches Lied.

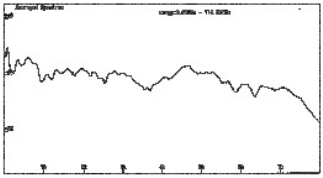
タタール



22. Tatarisches Lied.

資料21と22は同一のタタール女性による歌である。200Hz以下が急な谷によって分離されている。包絡線は2.6kHzより低域では異なるが、これより高域では一致する。また両例に於いて、4.6kHzに峰があり、そのエネルギーは母音域の峰のそれに等しいか、それを超えるものである。これがタタールの歌の特徴に対応するものなのかも知れない。

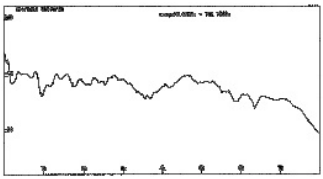
民族不明



23. Lied?

上の資料17の例によく似ている。200Hz以下が急な谷によって分離されている。3.6kHzに深い谷が形成され、4.6kHzの近辺に位置する高い峰のエネルギーは低域の峰のそれを超えている。

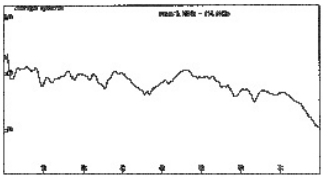
トルコ



26. Türkisches Lied aus Konstantinopel.
吹き込み者不明

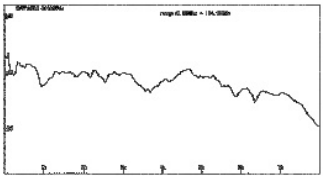
この例は、資料21と22のタタールの例と比べた場合、いくつかの点で大きく異なるものである。3.6kHzより高い帯域では、むしろ資料27のオスチャクサモエードの分析例とほぼ一致する。また、200Hz以下が急な谷によって分離されている。これを含め、ここまでの例の大部分で、1kH-2.6kHz-3.6kHz-5.8kHzの周波数座標軸に谷が形成されていることが判る。

ロシア



24. Russisches Lied.
S. Zavodovolij.

ロシア



25. Allgemeine russisches Romanze.
歌い手不明

資料24は ***Ах, ты ноченка***「夜よ」、25は ***Красный сарафан***「赤いサラファン」というロシアの民謡である。ドンネル資料の中にある唯一の印欧語話者の音声であり、且つ旋律の上下が大きい点で、歌らしい歌である。「赤いサラファン」は嫁にゆく女の歌うものだが、ここでは資料24とは異なる男性が歌っている。特徴として、200Hz以下が急な谷によって分離されていること、3.6kHzを中心に谷が形成されており、これより低域では様子は異なるものの、高域では一致することが挙げられる。また4.6kHzの近辺に位置する高い峰のエネルギーは低域の峰のそれを超えている。

考　察

目録中28本の蝋管資料を長時間平均スペクトルの視点から比較する。筆者がケート語でではないかと推測する資料5、6、9の音声は、他の例に比べ包絡線全体の形状相互の違いがやや大きく、その上、2kHz以下の周波数領域でのエネルギーの変動がやや大きい。また資料7と8は、母音 i、e、a の F1 周波数に相当する座標上に、鋭い峰をもつものである。これは当該の母音が卓越して使われたことを示すが、他の例には全く見られない独特の現象であるようだ。これらを含む28個の音声資料は、その吹き込み者の民族構成の点から見ると、推定ケート語（言語系統未定）、オスチャク・サモエード語（ウラル語サモエード語群）、トルコ語（アルタイ語チュルク語群）、ロシア語（印欧語スラヴ語派）、カマッシ語（ウラル語サモエード語群）、タタール語（アルタイ語チュルク語派）から成るが、これらに共通する特徴がある。それらは

次の四点であり、図１と対比させ、図2としてまとめる：

1) 約200Hzの辺りに急峻な谷が形成されること。
2) 200Hz～3.6kHzの領域に包絡線の大きな違いが現れること。
3) 1kH-2.6kHz-3.6kHz-5.8kHzの周波数座標軸に谷が形成されること。
4) 3.6kHzより高域では包絡線のプロフィールそのものが似てくること。

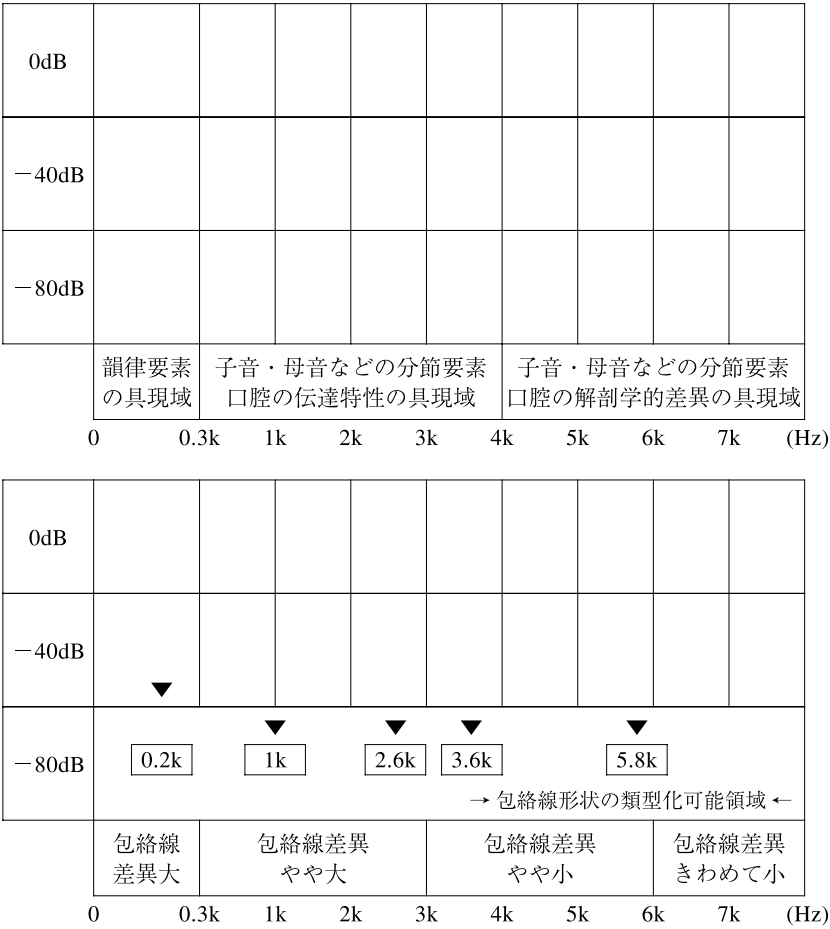


図2. 長時間平均スペクトル上での包絡線の差異の現われ方と音響エネルギーの減衰点を、図１と対比して示した図（▼は減衰点を標示）。□で囲んだ数字は減衰周波数の数値。

周波数軸上でのエネルギーの減衰点の位置は、その殆んどがケート語（推定）、オスチャク・サモエード語、トルコ語、カマッシ語、ロシア語、タタール語に於いて通言語的に現れる。言い換えるならば、これらの言語では、周波数軸時上0.2k－1k－2.6k－3.6k－5.8kの4点で、調音が義務的に制限されているのである。音声の長時間スペクトル分析は、個別言語の音声を統計的に処理する結果、分析結果には超分節音素以外の音韻の生得的差異は極端に薄められた形で現れる。第2章の冒頭で述べたが、筆者はこのスペクトル包絡線の概観が、その言語を聴いたときに感じとる漠然とした聴覚印象に、ある程度対応すると考えている。しかし、音声を平均的に処理した結果に、このような現象が現れる理由については、残念ながら、筆者等には説明ができない。

蝋管録音資料28例（時間にしておよそ60分）を分析する過程で、我われは次のような吹き込み話者同定の方法を提案した：

1) F0領域に現れる峰々と、その直近の200Hz位置にある、深い谷の右側に現れる峰々の斜面の形状を比較すること。例えば任意の比較例AとBに於いて、200Hzの谷の左右の峰々の斜面が複数の点で同時に重なりあえば、両者は同一人物の吹き込みによる可能性が高い。吹き込み者が判っている例の大部分で、この方法は有効であることが確かめられた。
2) またこの方法に拠れば、資料1と2は吹き込み者の名前は同じでも、二つの斜面は重なり合わない。筆者等はそれぞれ別の吹き込み手であると考える。同様の照合方法により、資料3と4も同一話者によるもの、資料16は Pan Andreev によるもの、資料19、20、21のカマッシ語の例も同一女性話者によるもの、資料24と25も同一歌手によるものと判定される。

平均スペクトルを読み取った部分では、3.6―8kHzの帯域での包絡線はお互いがどれも似てくると指摘した。しかし、その似たもの同士に対しても、直感的ではあるが、ある程度の類型化を施すことが可能であるように見える。但し、この領域での包絡線形状の類似が、音声のいかなる特長に対応するのかについて、未だ我われは明確な意見を構築できないでいる。言語名が明記された例に於いて、3.6kHz以上の包絡線を比較検討し、ここで次のように類型化を行い、図3としてまとめてみよう：

1) 資料5、6、9が集団A、資料7と8が集団B、資料3と4が集団Cとしてまとめられる。A、B、Cは相互によく似た集団でもある。このうちBに接近するものとして、

資料19、20、28の集団Dがある。このDに対して、資料 21、22、24、25、26、27がまとまって位置している。これをEとする。また、先のBには、Dとは異なる有様で、資料10、11、12、13、14、15、17が接近している。これをFとする。このFには資料1と2が接している。これをGとする。

2) 類似の距離の直感的測定に拠れば、上の有様は次のように表現できるであろう。

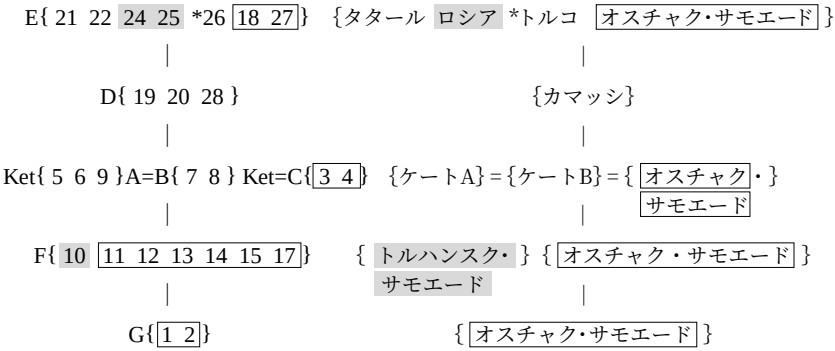


図3. 3.6kHzより高域での包絡線の類似によって音声資料を7集団にまとめた図。= は「大変類似する」を、｜は「比較的類似する」を表す。

印欧語のロシア語の例が、タタール語、トルコ語、オスチャク・サモエード語の群に入ること、カマッシ語の例が孤立していること、さらにはオスチャク・サモエードの10例が四つの下位群に分かれことが興味深い。ただし、オスチャク・サモエードのこのまとまりは、地域差によるものではなく、吹き込み者の違いによるものである可能性もある。

よって、我われは、1) 話者個人性は0～200Hzの峰々と200～1kHzの峰々に、2) 歌声の旋律変化の特徴や各種の母音の特徴は1kHz～3.6kHzの帯域に、3) 各種の子音の特徴は3.6kHz～5.8kHzの帯域に、それぞれ集中して現われ、さらに 4) 子音の統計的頻度が濃密に反映する領域である3.6kHz～8kHzの包絡線を比較することにより、ドンネル音声資料は、ある程度、言語系統の面からの類型化が可能であると考えるものである。

引用文献一覧

1. Karger N. K. *Bukvar* UCPEDGIZ Moskva-Leningrad 1934.
Каргер Н. К. **Букварь УЧПЕДГИЗ Москва Ленинград** 1934.
2. Энциклопедия: Народы России. С.189. **Издательство «Большая российкая энциклопедия» Москва** 1994.
3. Popov A. A. and Dolgikh B. O. *The Kets.* The Peoples of Siberia, edited by M. G. Levin and L. P. Potapov. The University of Chicago Press. Chicago and London 1965.
4. Azerbaijan International, Summer 1997 [5.2](Internet version). Alphabet Transitions: The Latin Script: A Chronology. *Symbol of a New Azerbaijan,* by Tamam Bayalty.
5. Donner K. *Ketica*. Materialien aus dem Ketischen oder Jenissei-Ostjakischen // Mémoires de la Société Finno-ougrienne. Vol. 108. Helsinki, 1955.
6. ***Дульзон А. П.*** **Кетский язык. С.**48.
Издательство томского университета. Томск 1968.
7. ***Алексеенко Е. А.*** **Кеты. С.** 132. **Издательство «Наука».**
Ленинград 1967.
8. Janhunen J. Glottal Stop in Nenets. Mémoires de la Société Finno-ougrienne. Vol. 196. Helsinki, 1986.
9. *Geographical Distribution of the Uralic Languages.* Finno-Ugrian Society. Helsinki University. Helsinki 1980.
10. 大林太良『北方の民族と文化』頁175-176。 山川出版社 1991
11. エドワード・エヴァンス＝プリチャード総監修　梅棹忠夫日本版総監修
『世界の民族14 シベリア』125頁。　平凡社1979。
12. 下村五三夫「ディジタル・ソノグラフによるネネツ語声門化音の分析」
日本音声学会編『音声の研究』（第22集）　東京1988